

堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書

1991

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、遠州トラック株式会社代表取締役豊田順介（静岡県袋井市永楽町325番地）を委託者とし、袋井市長豊田舜次（静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1）を受託者として行なった平成元年度及び、平成2年度遠州トラック観光センター建設事業に伴う、堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書である。
2. 従来より、堀越遺跡として登録されている遺跡が市内には2ヶ所あり、今回調査を行なった地点を、周辺の字名「ジュウヤマ」を付し、本報告書より「堀越ジョウヤマ遺跡」と呼称することとする。
3. 本発掘調査は、袋井市教育委員会社会教育課の白澤 崇を調査担当者とし、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。
4. 本書の執筆分担は次のとおりである。
第1章～5章 白澤 崇
付 篇 松井一明
第4章の理化学的分析については、古環境研究所、バリノ・サーヴェイ株式会社より貴重な報告をいただいた。
5. 本書に掲載した挿図は、白澤・松井・森井雅彦・早川保子が分担し作成した。現地及び遺物写真は、白澤が行なった。
6. 本書の編集は白澤が行なった。
7. 発掘調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査及び本書の発刊に係わる事務は、袋井市教育委員会社会教育課文化振興係が担当した。
9. 本調査及び、本書作成に関し、以下の方々より有益なるご教示を賜った。（順不同・敬称略）
向坂 眞二 平野吾郎 宮本長二郎 加藤芳朗 中嶋郁夫 原 茂光 西尾太加二
広江耕史

目 次

第1章 序 説	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 発掘調査の方法・経過・整理体制	1
1) 調査の方法 2) 経過 3) 経過整理体制	
第3節 位置と環境	2
第2章 遺 構	4
第1節 基本層序	4
1) Iトレンチの土層	
第2節 遺 構	6
1) 掘立柱建物 2) 竪穴住居 3) 土坑 4) 溝 5) A地点	
第3章 遺 物	22
第1節 土 器	22
1) 住居址内出土土器 2) 溝1出土土器 3) A地点出土土器	
4) 土坑1出土土器	
第2節 木 器	40
第4章 理化学的分析	44
第5章 ま と め	52
1) 崩壊遺跡の景観復元 2) A地点出土建築材の復元 3) 土器	
付 篇 第1次発掘調査の報告	59

挿 図 目 次

第1図	堀越遺跡周辺弥生時代遺跡分布図	3
第2図	1トレンチ土層断面図	5
第3図	堀越遺跡全体図	7
第4図	1号・2号掘立柱建物実測図	9
第5図	1号住居実測図	10
第6図	2号住居実測図	11
第7図	3号住居実測図	12
第8図	4号・5号住居実測図	14
第9図	土坑1遺物出土状況図	15
第10図	溝1遺物出土状況平面図(1)	17
第11図	溝1遺物出土状況平面図(2)	18
第12図	A地点遺物出土状況平面図	20
第13図	1号・2号住居床面出土土器実測図	24
第14図	2号住居床面出土土器実測図	25
第15図	3号住居床面出土土器実測図	26
第16図	5号住居床面出土土器実測図	27
第17図	溝1下層出土土器実測図(1)	28
第18図	溝1下層出土土器実測図(2)	29
第19図	溝1下層出土土器実測図(3)	30
第20図	溝1上層出土土器実測図(1)	31
第21図	溝1上層出土土器実測図(2)	32
第22図	溝1上層出土土器実測図(3)	33
第23図	溝1上層出土土器実測図(4)	34
第24図	溝1上層出土土器実測図(5)	35
第25図	溝1上層出土土器実測図(6)	36
第26図	溝1上層出土土器実測図(6)	37
第27図	A地点出土土器実測図	38
第28図	土坑1出土土器実測図	39
第29図	A地点出土木製品実測図(1)	41
第30図	A地点出土木製品実測図(2)	42
第31図	A地点出土木製品実測図(3)	43
第32図	上層断面図と分析試料の採取箇所	46
第33図	イネのプラント・オバールの検出状況	46

第34図	おもな植物の推定生産量と変遷	46
第35図	堀越遺跡周辺地形復元図	51
第36図	A地点出土建築材復元模式図	56
第37図	6号住居実測図	
第38図	第1次調査出土土器実測図(1)	
第39図	第1次調査出土土器実測図(2)	
第40図	第1次調査出土土器実測図(3)	
第41図	第1次調査出土土器実測図(4)	
第42図	第1次調査出土土器実測図	

表 目 次

第1表	プラント・オーバー分析結果	47
第2表	堀越遺跡出土材の樹種	52
第3表	堀越遺跡周辺の遺跡調査記録一覧表	55
第4表	堀越遺跡出土土器編年表	58

図 版 目 次

図版1	遺構完掘状況(南西から)・溝1完掘状況(西から)
図版2	溝1上層遺物出土状況(1)(西から)・溝1上層遺物出土状況(2)(西から)
図版3	溝1上層遺物出土状況(3)(東から)・溝1上層断面(西より)
図版4	1号住居完掘状況(南より)・3号住居完掘状況(東より)
図版5	2号住居遺物出土状況(北から)・2号住居遺物出土状況、部分(北から)
図版6	4号住居完掘状況(北から)・5号住居遺物出土状況(南から)
図版7	A地点遺物出土状況(1)(北西から)・A地点遺物出土状況(2)(北から)
図版8	A地点出土木製品(1)
図版9	A地点出土木製品(2)
図版10	樹種顕微鏡写真(1)
図版11	樹種顕微鏡写真(2)
図版12	樹種顕微鏡写真(3)

第1章 序 説

第1節 調査に至る経過

掘越遺跡は、その字名「ジョウヤマ」が示すように、城館の存在した可能性が指摘され、周辺の史蹟等から、今川氏との関係が深いと考えられてきた。

そのような中、平成元年2月18日付けで、遠州トラック株式会社代表取締役の豊田順介氏より、袋井市堀越字上法事696-1他を、観光センター建設に伴い造成を行う計画が示され、事前に試掘調査の依頼が提出された。これを受け平成2年2月21日に試掘を行なうとともに、同年の9月5日付けの埋蔵文化財の発掘調査の届出を受け、9月21～22日にかけて発掘調査を行なった。これらの調査結果からは、従来、当該地域では不明であった、弥生時代の遺構の存在が明らかとなり、広い面積を掘り広げて、その範囲や、遺構の状況を記録する必要がでてきた。

そして、平成2年4月11日付けで、再度、埋蔵文化財の発掘調査の届出が提出され、本格的な調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の方法・経過・調査整理体制

1) 調査の方法

試掘調査、第1次調査の上層の状況を参考とし、重機によって表土の除去を行なった。表土の除去後、遺物包含層が検出され、多数の土器を含んでいたため、人力により、平面的に掘り下げることとした。5m間隔のグリッドを設定しており、包含層中の土器は、この杭を基に取り上げを行なった。

包含層除去後、精査を行なうと、多数の遺構が検出でき、検出順に通し番号を付すとともに、住所址や溝、土坑において、土器の多く出土した遺構については、基本的に10分の1の平面図を作成し、レベル、遺物取り上げ番号を付したのち、取り上げた。

調査開始当初は、北方に堆積したスクモ層については、堆積状況を観察、記録することのみにとどめる予定でいたが、下面より、木製品及び土器の出土が確認でき、一部を重機で掘り下げることとした。調査区内の全域について、スクモ層を除去することは、困難なため、50m前後のトレンチ2条と、坪掘りの試験坑を数ヶ所設定し、土層の観察に務めた。この土層の観察の1つとして、上層の状況より必要と思われる層について、プラント・オパール分析用の試料を採取し、報告を行なった。(第4章参照)

記録写真は、ブローニーサイズ原画(白黒・カラーリバーサル)と35mmサイズ原画(白黒・カラーリバーサル)を併用した。

遺構面上の等高線は、基本的に1m間隔で標高を測定し図化したオフセット測量である。

2) 経 過

平成元年4月9日 発掘資料搬入。

4月10日～17日 電機による表土除去、廃水路の設置。弥生時代の上器片を確認。

17日～5月1日 b層の掘り下げ。

5月15日～24日 溝1を検出。住居址を検出。それぞれ覆土の除去、図化、写真撮影。

6月7日～19日 A地点より木製品を検出。図化、写真撮影。

7月20日 全体写真の撮影、A地点の完掘。本口をもって現地作業を終了する。

3) 調査整理体制

発掘調査計画機関 遠州トラック株式会社

発掘調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長	浅井通男	主 任 事 務	建部千代子
社会教育課長	岩崎 保	主任学芸員	永井義博・加藤理文
文化振興係長	小粥保夫	学 芸 員	松井一明・森井雅彦
主 査	吉岡伸夫		白澤 崇(調査担当)

現地発掘調査

発掘作業	伊予田寅次郎・川島良一・佐藤好孝・鈴木忠司・鈴木健一・森田一平・山本敬一・増田治平・田辺みよ平賀明美・鈴木一子・木多八重子・本多マサエ・玉川きぬ・早川保子・早川里美・山本はつ江・鈴木きみ子・山崎雪江・寺田しま・池ヶ谷京子・安間しげ子・永田のお枝・高橋巳代子・深沢やよい
発掘整理作業	早川保子・近藤よしの・平賀明美・木多八重子・本多マサエ・鈴木智美・田中奈美子

第3節 位置と環境

堀越遺跡は、磐田原台地を西方に望み、太田川、宇刈川に挟まれた、微高地上に立地する。周辺には、弥生時代中期より発展する鶴松遺跡を拠点集落とし、後期には、鶴田、徳光・土橋玉越遺跡と、微高地上に集落が現れてくる。これらの低地集落に対して、北東地域では、三沢遺跡、一色前田遺跡が高地に位置する集落であり、特に一色前田遺跡の環濠と推定される溝の存在は注目される。また、南方に目を向けると、桂甲等の山上で注目された、団子塚古墳群内には、弥生時代の方形周溝墓や、隣接する北山遺跡でも住居址、方形周溝墓を多数検出しており、集落と基地の関係を考える好例となる。さらに、西方の磐田原台地東縁には、多くの弥生時代を中心とする遺跡が存在し、中でも、三角縁神獣鏡等が出土した新豊院山墳墓群は、当該地域の弥生時代から古墳時代への変遷を考えるうえでも重要な位置を占めるものと思われ、後の磐田原の古墳群の展開との関係で注意される。



- | | | |
|------------|------------|-----------|
| 1. 堀越遺跡 | 2. 徳永遺跡 | 3. 鶴松遺跡 |
| 4. 鶴松古墳群 | 5. 鶴田Ⅱ遺跡 | 6. 鶴田Ⅰ遺跡 |
| 7. 川田遺跡 | 8. 春岡1号墓 | 9. 一色前田遺跡 |
| 10. 三沢古墳群 | 11. 笠梅遺跡 | 12. 中村遺跡 |
| 13. 新豊院山遺跡 | 14. 七反田遺跡 | 15. 権現下遺跡 |
| 16. 権現山遺跡 | 17. 下原遺跡 | 18. 屋敷山遺跡 |
| 19. 土橋遺跡 | 20. 玉越遺跡 | 21. 掛の上遺跡 |
| 22. 大門遺跡 | 23. 団子塚古墳群 | 24. 北山遺跡 |

第1図 堀越遺跡周辺弥生時代遺跡分布図 (1:50,000)

第2章 遺 構

第1節 基本層序

調査区内の基本的な土壤層位を上層より述べると、以下のとおりである。

青灰色鉄泥じり粘土層（耕作土 a層 層厚15~20cm）

黒色有機質土層（b層 層厚10cm）

暗灰色粒土層（c層 層厚15~20cm）

灰色鉄泥じり粘土層（d層 層厚15~50cm）

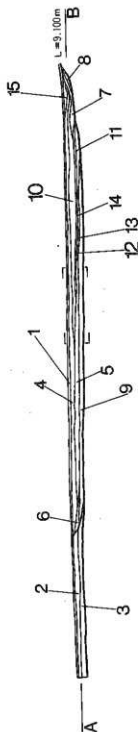
このうち、b層・c層については、土器片を比較的多く含んでおり、弥生時代後期を中心とする遺物遺構包含層と言える。また、土器片中に、所謂、S字口縁の台付甕の破片も少量含んでおり、後期でも新しい時期と考えられる。

b層・c層の分布は、調査区内の北及び、西へ向かって若干傾斜し、希薄となっており、遺構面のほぼ全体について確認できた。さらに、調査区の北側では、比高差1m前後をもって、傾斜があり、有機物を多数含んだ、スクモ層が厚く堆積している。この層は、3号、5号住居を検出した調査区北側にも一部広がっていた。

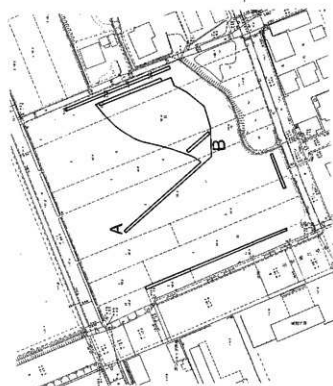
1) 1トレンチの土層

今回の調査区の西端から、北西方向に向かって、直線的に約50mトレンチを設定し、土層の観察を行なった。住居址等を検出した遺構面から北へ向かって、比高差1mをもち、傾斜している。これより、北西方向（トレンチ位置図のA方向）へ約40mは、基本的に、有機物を含むスクモ層が堆積している。基本層となるものは、図示したように、4層暗灰茶褐色植物層、5層暗茶褐色植物層、9層暗灰褐色粘質土層、10層灰褐色植物層の四層である。これらの各層は、ほぼ水平堆積をしながら、南から約37m付近より希薄となり、39m付近で消えてしまう。この付近は、2、3層とした、比較的安定した上層が見られ、これが微高地の立ち上がりと考えられる。

さらに、詳細は、第4章の理化学的分析のところを、参照願いたい。4層・5層・9層・10層からは、それぞれ、プラント・オパール分析用に土を採取しており、4層及び5層について水田跡の可能性が高いことが報告されている。特に、5層は、後述の木製品の出土を見た、A地点と同一時期の面と考えられ、弥生時代の水田跡の可能性が高いことと、微高地と微高地の間の低湿地を遷地して水田地を設定している状況がよく観察できる。ただ、プラント・オパールの分析のみであり、実際のトレンチの範囲内では、畦畔等、遺構としては、検出できなかった。5層を水田とするならば、9層の下面では、かなりの湧水があり、現代と当時の水位の問題もあろうが、湿地であった可能性が高い。



1. 表土
2. 淡灰茶褐色粘質土 (淡灰色粘り)
3. 黄灰色砂質土
4. 暗灰茶褐色植物層 (暗緑色粘り)
5. 暗茶褐色植物層
6. 黒茶褐色植物層 (カーボン様も少量含む)
7. 淡灰褐色粘質土 (黄褐色土混じり)
8. 淡黄灰色粘土層
9. 暗灰褐色粘質土層 (カーボン様も少量含む)
10. 灰褐色植物層
11. 黒色植物層
12. 淡灰茶褐色植物層 (やや粘質)
13. 暗茶褐色植物層
14. 淡灰茶褐色植物層
15. 暗茶褐色植物層



プラント・オパール分析試料採取箇所 (1/80)

第2図 1 トレンチ土層断面図 (1/320)

第2節 遺 構

1) 掘立柱建物

1号掘立柱建物

1号掘立柱建物は、溝1で大きく区画された遺構群の、南に位置する。全体図(第3図)の等高線からも分かるように、調査区内の南北では、北が低く、南が高い。この南へ向かって高くなってゆく傾斜は、さらに、現状では大きく削平されているものの、比高差10数mの丘陵へと続いている。1号掘立柱建物は、この緩傾斜地形に、桁行方向を平行させている。

梁行1間、桁行2間の建物が1棟、さらに、桁方向を、西へ約7度程度移動させた、同じく1間×2間の建物が想定できる。

両者は、ほぼ同一の規模を持ち、梁行約2m60cm、桁行2m80cmと、梁行約2m60cm、桁行約2m40cmとなり、正方形に近い平面形態を有する。梁間の距離は、それぞれ、1m40cm、1m20cm前後となる。

柱穴の直径は、40cm前後と、均一であり、柱穴の深さは、10cmから20cm前後と比較的浅い。これは、遺構の残存状況に起因するものと考えられる。

また、関連する遺構として考えられるものは、建物東側約20cmに、桁行に平行して長さ2m70cm、幅30cm、深さ20cmの溝5がある。これは、近年、報告が増加しているが、掘立柱建物に平行して溝を掘り、廃水機能を持つとともに、区画の意味あいを持つ溝と考えられる。このような視点からすれば、梁行方向にも同じく、長さ3m50cm、幅40cm、深さ10cmの溝6が、ほぼ平行して有り、この溝については、後述するが、溝2、溝9との関連から、廃水機能よりむしろ、区画の溝としての機能を有している可能性が高い。溝5についても、区画の機能が低いと考えられ、L字形に区画された中に、掘立柱建物が存在することとなり、1号、4号住居(堅穴住居)からは分けられた存在となる。このような配置からすれば、速断はできないが、高床倉庫の可能性もあり、梁行方向の南側中央に、直径20cm前後のビットが検出されているが、このようなものが、梯子用の穴になる可能性はある。

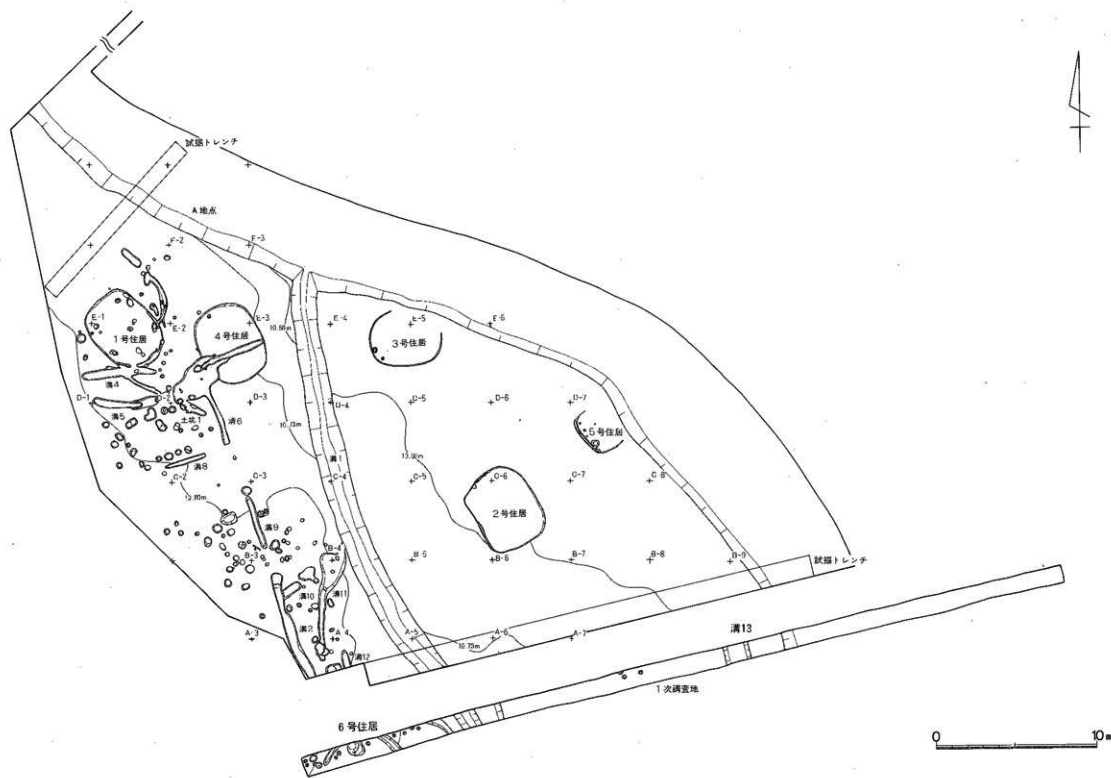
2号掘立柱建物

2号掘立柱建物は、1号掘立柱建物の東約5mに位置し、南から北へ傾斜する地形に対して、梁行をほぼ平行させている。

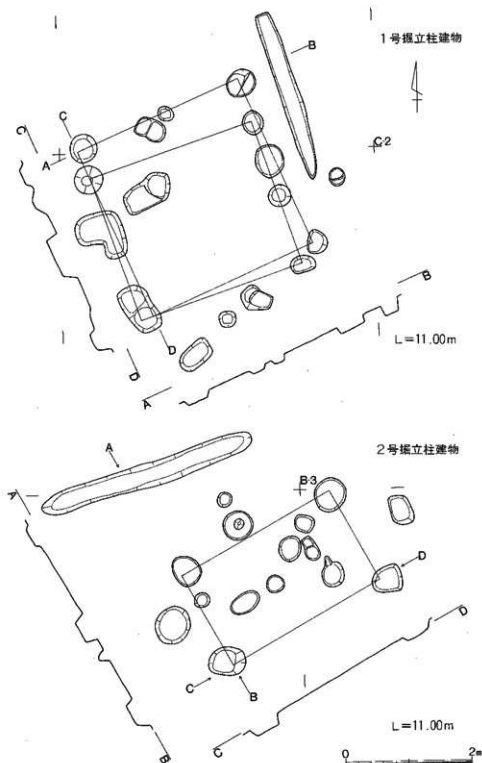
梁行1m60cm、桁行2m80cmの、1間×1間で、長方形の平面形態を有し、柱穴の直径は、それぞれ50cm前後であり、深さは10cmから20cmと浅い。

関連する遺構としては、北側桁行方向に平行して、長さ3m50cm、幅40cm、深さ5cmの溝9がある。この溝9は、先述の溝6の直線延長上にあり、3m程度の間隔を有している。さらに、溝9の直線上には、1m80cmの間隔を開けて溝2が東方へ伸びている。この3条の溝は、連のものと考えられ、掘立柱建物を区画する可能性が高い。

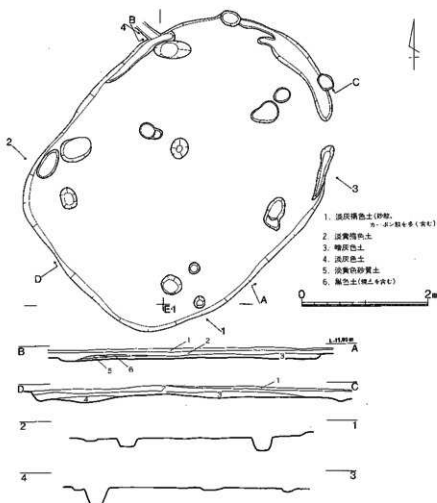
いずれの溝も、川土土器よりすれば、弥生時代後期のものと考えられる。



第3図 堀越遺跡全体図 (1/160)



第4図 1号・2号掘立柱建物実測図 (1/60)



第5図 1号住居実測図(1/60)

2) 堅穴住居

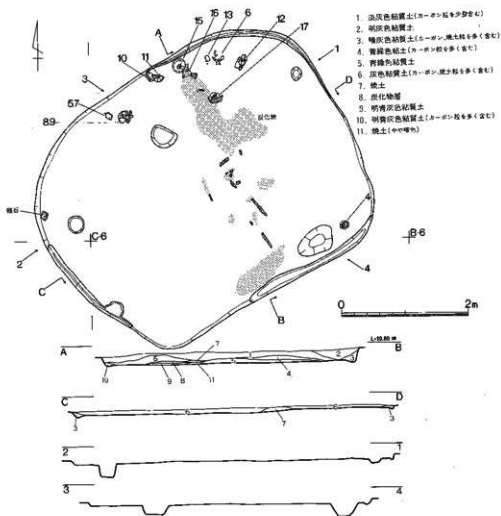
1号住居

今回の調査区内では最も南で、しかも、最も高い位置に立地している。

長軸 5 m 20 cm、短軸 3 m 80 cm の隅円長方形の平面形態を持ち、長軸方向は N-45° - E である。明瞭な壁溝は検出できなかったが、北から北東方向の短辺側で、幅 20~30 cm、深さ 10 cm、断面が僅かに U 字状の壁溝と考えられる溝を 3 条確認した。

床面内において、ビットは 13 個検出したが、当住居に關係すると考えられる主柱穴は、明確には確認できなかった。平面形態及び、規模からすれば、四本柱の形態を取るものと考えられ、南西側の短辺で検出した、1 対のビットが一方の主柱穴になる可能性はある。この柱穴は、直径 40 cm、深さ 15~35 cm で、柱間は 2 m 20 cm 前後である。

また、床面上からは遺物の出土は無く、埴も検出できなかった。



第6図 2号住居実測図(1/60)

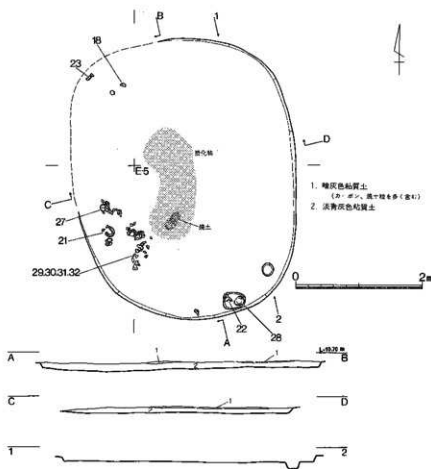
2号住居

2号住居は、溝1より北側に位置し、隅丸長方形の平面形態である。長軸方向は、N-60°-Eで、長軸5m10cm、短軸4mの竪穴住居である。

検出面から、基盤層を15~20cm掘り下げて床面を構築しており、北東、南西、南東隅より、幅20cm、深さ5~10cm、断面U字状の壁溝と考えらるる溝を3条検出した。

ピットは、4個検出したものの、主柱穴として成り立つ配置ではなかった。

また、床面上からは、土器と軽石を検出している。これらは、第6図で示したように、炭化物の集中する部分や、炭化材、住居址内への堆積土の中に、炭化物や焼土粒が比較的多く混入していることから、火災を受けている可能性が有り、そのことからすれば、床面上の土器は、一括性が高い。ただし、火災の有無については、焼上面の検出は今回されなかったことや、諸種の観点から慎重な検討が必要である。



第7図 3号住居実測図(1/60)

3号住居

3号住居も、2号住居と同じく、溝1よりも北側に位置し、楕円形の平面形態である。長軸方向は、ほぼ南北に取り、長軸4 m50cm、短軸3 m50cmの竪穴住居である。

検出面から、基盤層を10cm前後掘り下げて床面をT築している。壁溝は検出されず、ピットも2個存在するものの、支柱穴としては、成り立ち難い。

床面は、ほぼ水平に形成されている。また、住居の北西隅の一角は、植物質の堆積の影響から、平面形態の検出は、かなり困難であり、基盤層の掘り込みは確認できなかった。

3号住居からも、床面上に土器の出土が見られた。これらについても、一括性は高いものと考えられる。

住居址内への堆積土の状況は、あまり明瞭ではないが、一部に炭化物粒、焼土粒の確認できる層や炭化物の集中箇所がある。第7図の焼土の集中地は、炉の可能性が高い。

4号住居

4号住居は、溝1の南側、1号住居に近接した位置に立地している。楕円形の平面形態で、長軸方向は、 $N-63^{\circ}-E$ で、長軸5m10cm、短軸4mの竪穴住居である。

検出面が即、床面に近い状態であり、僅かに5cm前後掘り下げて床面としている。残存状態も良くないことから、壁溝も検出できず、2個のピットも主柱穴には成り難い。

住居址内への堆積土の観察からは、他の住居址で見られたような、炭化物粒や焼土粒の混入は無かった。

また、床面上の土器も無く、覆土中にも土器片は無かった。しかし、不明土坑1より北西方向へ伸びる溝により、住居のほぼ中央を2分する形での切り合い関係は観察でき、ほぼその築造時期は推定できる。

1号住居と近接する点や、2号住居とほぼ長軸方向を同じくする点も注意する必要がある。

5号住居

5号住居は、今回の調査区内では最も北に位置し、なお且つ、低い位置に立地している。長軸方向は、 $N-34^{\circ}-W$ で、長軸は残存部分で1m50cm、短軸2m90cmの竪穴住居である。

当住居も、検出面が床面に近い状態であったが、5cm前後掘り下げて、ほぼ水平な床面を形成している。

壁溝については、南東の短辺側で、軸20cm、深さ10～15cm、断面U字状の溝を1条検出してゐる。ピットは、7個検出しているものの、径の大小や、小さすぎる点、そして、平面形態の全容が明らかでないことから、柱穴の構成等、不明である。

床面上からは、土器が検出できた。これらの土器は、住居址内への堆積土中の炭化物粒や焼土粒の存在、床面上の炭化材の一部及び、炭化物の集中箇所が存在等、2号住居の検出状況に近い。

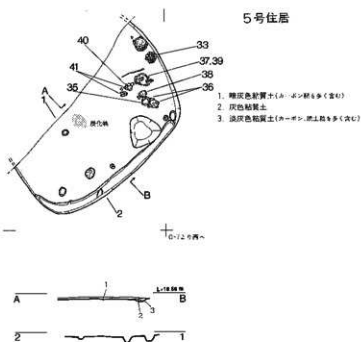
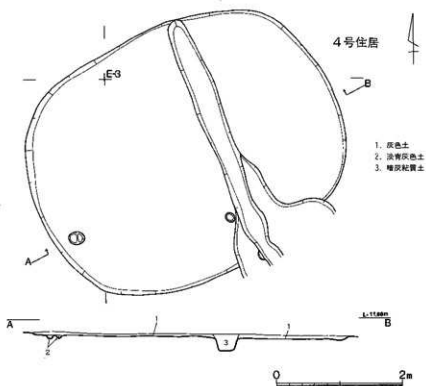
以上のような状況は、先にも述べたように即断は避けたいが、火災を受けている可能性は、指摘しておく必要がある。

また、住居址床面上の土器も、2号、3号住居と共に、活性の高いものと考ええる。ただし、住居址の北西半分が、植物層の堆積もあり、困難であり、全容を検出できなかった点は、残念である。

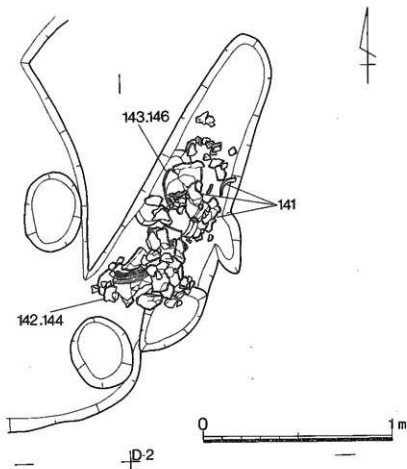
竪穴住居について

今回の調査では、5棟の竪穴住居が検出できた。個々の説明は行なったが、ここで5棟全体について、若干述べておく。

5棟については、大きくは2つのグループに分けられ、それは、溝1を境として、1号、4号住居と2号、3号、5号住居の二者である。溝1の左右では、遺構の数も極端に差が有り、単なる溝としての機能にとどまらず、区画の意識が強く表れているようである。これらはさらに、1号、4号住居の東側には、さらに区画を持つ掘立柱建物が存在することからも観取できる。住居の大きさ、形態等、特に大差は見られず、土器の組成等より観察する必要があるが1号、4号の資料の欠加が惜まれる。



第8図 4号・5号住居実測図 (1/60)



第9図 土坑1遺物出土状況図(1/20)

3) 土 坑

土坑1

土坑1は、1号掘立柱建物の北側に位置し、長辺1m70cm、短辺50cm、深さ10cmの比較的浅い土坑である。

不明土坑1を切って、土坑1が形成されており、次章の遺物のところで触れるが、台付甕1点、壺3点を近接して検出することができた。(第9図参照)

浅い土坑であり、堆積土は単層で、しかも、近接していることから、この土坑についても、出土遺物の「括性」は高いと考える。

ただし、土坑の位置、形態、土器の出土状況からは、その機能を特定することはできなかった。

その他の土坑

土坑1の他に、今回の調査区内では、4個の土坑を検出している。土坑2～5は、いずれも溝2と溝11の付近に有り、明瞭な土器の出土も無く、その性格は不明である。

4) 溝

溝1

溝1については、先の竪立柱建物や、竪穴住居との関係より若干触れてきたが、ここで改めて述べておく。

溝1は、調査区内のはほぼ中央を、東西方向に掘削している。調査区内で、全長26m、幅1m 60cm、深さ60～70cmで、断面は、開きぎみのU字状を呈する。この溝は、調査区東側で行なわれた第1次調査時にも検出しており、さらに東へ伸びるものと考えられる。

個々の遺物については後述するが、溝1の上層からは、多量の土器片を、ほぼ全域において検出した。土層の堆積状況については、第10・11図を参照願いたい。基本的には、3～4層の分層が可能であり、遺物のところで述べる上層、下層は、図示したように(第10・11図)、1層が上層・2層が下層に対応する。

下層については、上層ほど、土器の出土は多くない。また、下層については、第10図の上層図に示した、6層より若干の土器の出土が有り、最下層として設定できるが、溝の全域には、同層は無いようである。(第1次調査時の最下層とは対応せず。)

土層の説明でも記しているように、1層、2層、4層、6層の各層からは、炭化物粒の混入が観察でき、特に第10図の6層からは、炭化物粒に混じり、焼土塊を検出しており、この溝内への土器の投入の意味の一端を示す資料となろう。

また、溝の本来の機能については、溝の東西では若干のレベル差があり、東側が低い。さらに、第1次調査時の溝の観察からすれば、東側でかなり深くなる可能性がある。この溝の西端が低湿地及び田地の可能性の有る地域と合流していることからすれば、集落内への導水路と、田地の廃水の機能を有する溝であった可能性が高い。もちろん、その左右の遺構の濃密からも、区画の意識も含まれていると言える。

この溝の上層へ多量の土器を投棄した時点で、集落も廃絶したと考えられる。

5) A地点

今回の調査の、西端で、木製品、土器の集中して出土した地区がある。この地区を便宜的にA地点と呼称する。

当地点は、第31図のW-11に見るような、建築材を横木や杭として転用しており、その中には、農具及び自然木が含まれている。杭の間隔は不規則で、数も少なく、一般的な矢板を打った畦畔と比べ雑なつくりである。上面のこれらの木材を除去すると、長さ10m、幅1m、深さ30cmの溝を検出したが、上面の木材との関係は不明である。

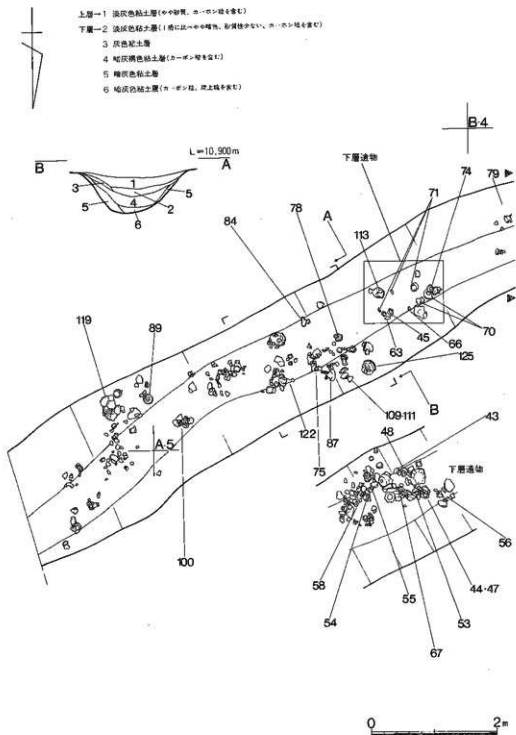
出土位置からすれば、護岸施設の可能性もある。

註

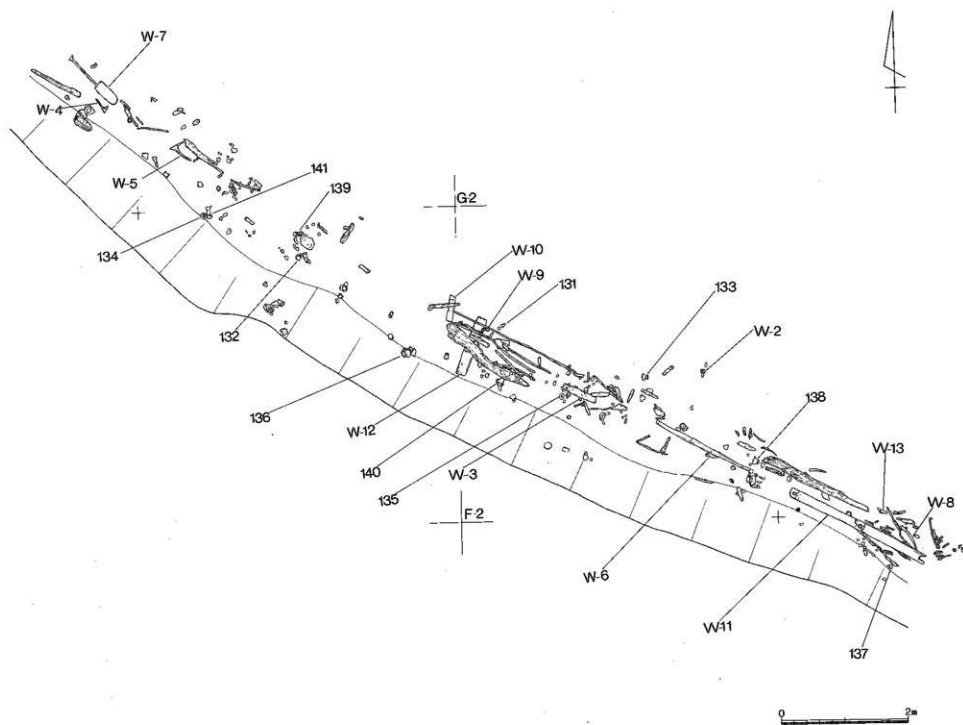
註1) 周辺での例として、浜松市の梶子遺跡の7次調査の報告がある。

浜松市遺跡調査会『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次調査概報』1983

註2) 寺沢薫「火災住居覚書 大阪府観音寺山遺跡復元住居の火災によせて」『青陵』40号・1981



第10図 溝1遺物出土状況平面図 (1) (1/60)



第12圖 A地点遺物出土状況平面図 (1/60)

第3章 遺 物

第1節 土 器

今回の調査では、多量の土器が出土し、その全点について、図化・整理作業を行なうことはできず、未整理の部分が多い。ただし、住居址内資料、土坑1資料については、全点をまとめることができた。その反面で、溝1やA地点の土器は、極力図化を行なったが、統計処理も全点について行なえておらず、未消化の状態である。

1) 住居址内出土土器

1号住居では、床面上より土器を検出することは無く、第13図の1～3に示した土器は、覆土より検出したものである。2の高杯には、押圧横線文が施され、3の台付甕は、やや丸みを持った口縁端部に、外面は刻みを、内面には横ハケを有している。

第13図の4から第14図の全点は、2号住居址の床面上より出土した。一括性の高い土器のセットである。甕1点、台付甕7点、高杯4点(5と7、6と12は接合の可能性が有り1点とした。)という組成となる。台付甕では、12のような大形品に対して、9のような小形品が見られる。高杯では、16の大形品に対し、14・15・17といった小形品が有り、その中でも、15のように片口のものも有り、用途に応じた使い分けが想定される。高杯の口縁端部は、単純口縁である。

第15図は、3点住居の床面上より出土した土器で、これも一括の高いセットである。甕14点、甕4点で、高杯は検出されなかった。甕の口縁は、明瞭な折り返しを持ち、内面には、L R、R Lの縄文や波状文を施し、口縁端部外面には棒状浮文を付す。甕の口縁外面は、直線的な面を有し、備かな刻みを施している。(但し、第15図22・28は別遺構の可能性あり。)

第16図は、5号住居址の床面上より出土したもので、住居の北半分の検出はできなかったものの、一括性の高い資料である。甕3点、台付甕5点、平底甕1点、鉢1点、片口細頸鉢1点という組成を示す。台付甕の口縁端部は、直線的な面を形成しており、刻みが施されている。平底の甕や鉢の存在、高杯の欠如等組成に変化が見られる。

2) 溝1出土土器

遺構のところで述べたように、溝1は、その土器の出土状態、上層の観察により、上層と下層に分けることができる。

上層に比べ、下層からの出土数は少い。第17図から第19図に示す土器が、その主なものである。甕の口縁部は、折り返しを持つものと、無いものがあり、折り返しを持つものの中には、内面にL Rの縄文を施すものがある。甕の肩部の装飾には、羽状刺突が用いられ、胴上部はタテハケ、下部は横位へのミガキを施している。台付甕の口縁端部は、やや丸みを持ち、外面には刻みを有する。高杯では、押圧横線文、突帯、刺突を施すものが存在する。杯や脚部のミガキは丁寧で、口縁端部は折り返しを持つものがある。広口甕は、口縁端部上面に、縄文を付し、

肩部に羽状刺突を施すものと、施さないものがある。口縁外面は、タテハケ、胴部は全面に、横位へのミガキを行なっている。ミニチュアの壺の存在や、小型の鉢の存在も組成上では、注意する必要がある。ただし、第18図の60などは、蓋になる可能性もある。

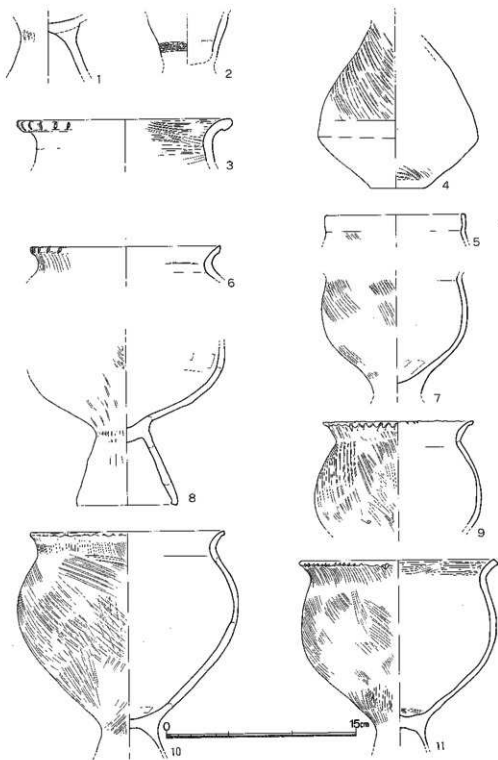
上属遺物は、第20図から第26図に図示したものである。壺の口縁部の形態では、折り返しを持つものと、持たない単純口縁の二種がある。内面にはI R、R Lの縄文を施し、外面には、棒状浮文を付す。円弧文や波状文の内面に施すものも一部にある。壺の肩部の装飾は、押圧横線文、羽状刺突文がある。胴部の調整は上部はタテハケ、下部は横位へのミガキを主体とする。第22図の91・92に見るようなミニチュアも少量存在する。台付甕では、口縁端部は、やや丸身を持ち、外面に刻みを持つものと、持たないものの二者がある。外面調整は、タタキを主体とするが、第24図の164のように、胴下半はミガキを施し、刺突を施した突帯を持つものもある。高杯では、口縁端部は基本的に折り返し口縁であり、刻みや、棒状浮文を施すものがある。杯部・脚部の外面はタテミガキを基本とし、杯部内面は、ヨコミガキとタテミガキを行なっている。杯部と脚部の接合部には、数条の押圧横線文を施すもの、羽状刺突を施した突帯を付すものがある。また、第26図の130のような赤彩で、外面に稜を有し、精微なミガキを施すものもあり、外來系の上器と思われる。その他の器種としては、小型の広口壺、片口細胴鉢等がある。

3) A地点出土土器

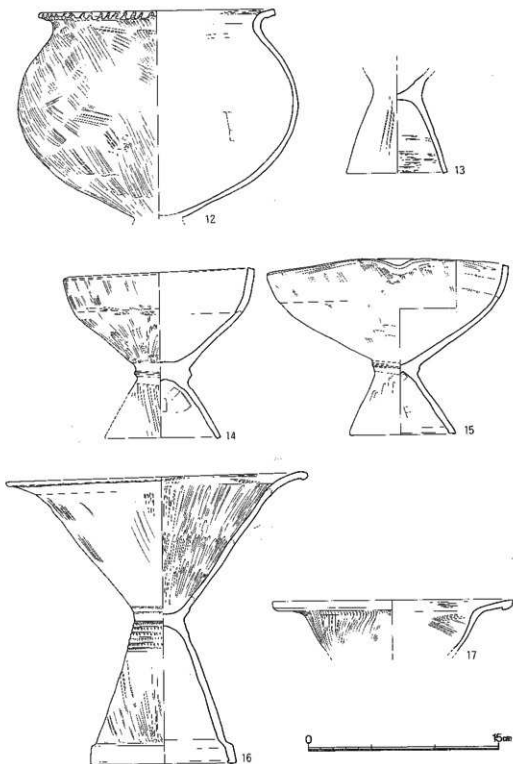
A地点からは、木製品とともに、多くの土器が出土した。壺では、第27図の133のような小型品と138のような中型品がある。肩部には羽状刺突、もしくは、縄文を施している。また、139のように、浮文を付すものも見られる。壺の頸部はタテミガキを、胴下半にはヨコミガキを行なっている。高杯は、口縁端部を折り返すものが基本であり、外面に刻みを施すものもある。外面は、杯部、脚部ともタテミガキを行なっており、杯部内面は、タテミガキ、ヨコミガキを施している。杯部と脚部の接合部は、羽状刺突を数段施す装飾性の強いものや、刺突文を斜方へ施すものなどがある。脚端部は、ほぼ直角に段を有し、段から端部までの長さも比較的長い第27図の136に見るような鉢もある。口の存在は不明で、外面上部はタテハケ、下部は、タテミガキを施している。内面は、タタキの後、横位へのナデを行なっている。また、131のような、ミニチュアの壺も存在する。台付甕では、口縁端部が断面方形に近く、外面に刻みを持つものと、折り返しの口縁を持つものがある。台付甕自体の出土量は、他種に比べ少なく、全容を知り得るものは無い。

4) 土坑1出土土器

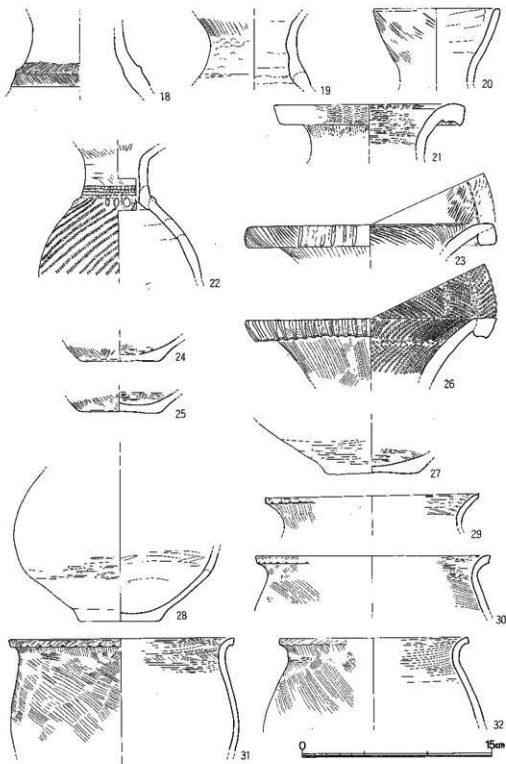
土坑1もその出土状況から、一括性が高く、壺3点、台付甕1点が出土している。(第28図の143と145、144と146は胎土、調整の類似より同一のものとした。) 壺の口縁端部は、単純口縁であり、肩部には、羽状刺突文を施している。外面の調整は、不明瞭ながら、タテハケを基本とし、内面底部は、ハケ調整を行なっている。胴部最大径位置はかなり下方である。台付甕は、肩部から「く」の字状に開く口縁部を持ち、外面に刻みを施している。



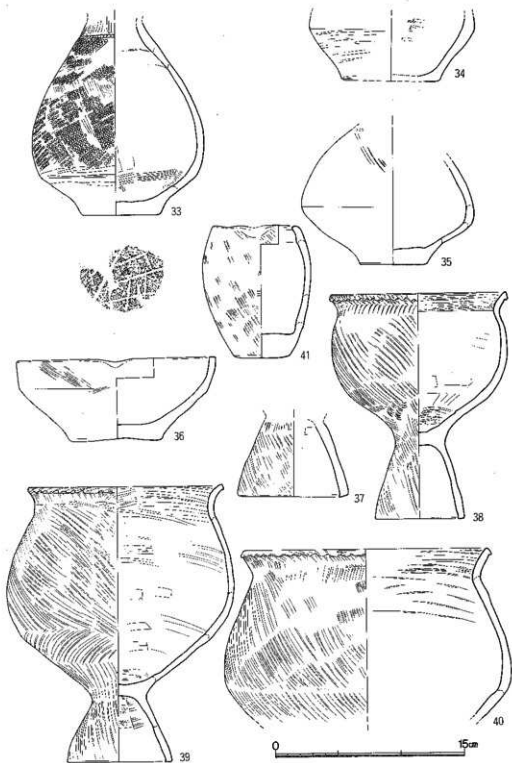
第13圖 1号・2号住居床面出土器実測圖 (1/3)



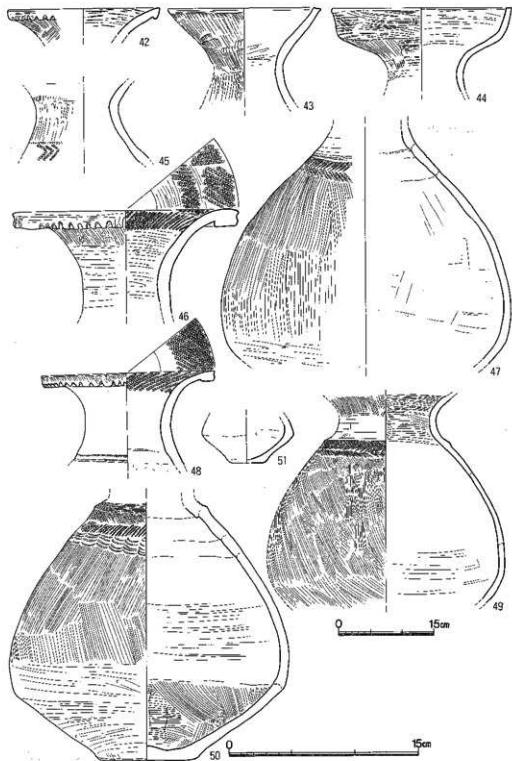
第14圖 2号住居床面出土土器実測図 (1/3)



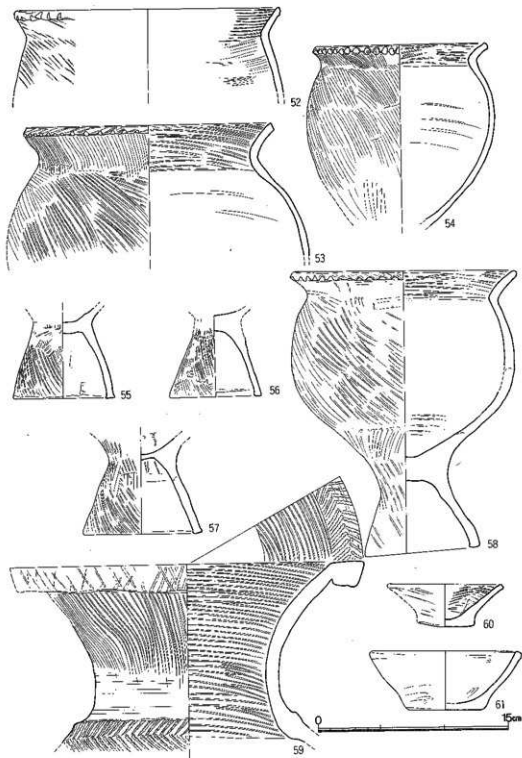
第15图 3号住居床面出土土器实测图 (1/3)



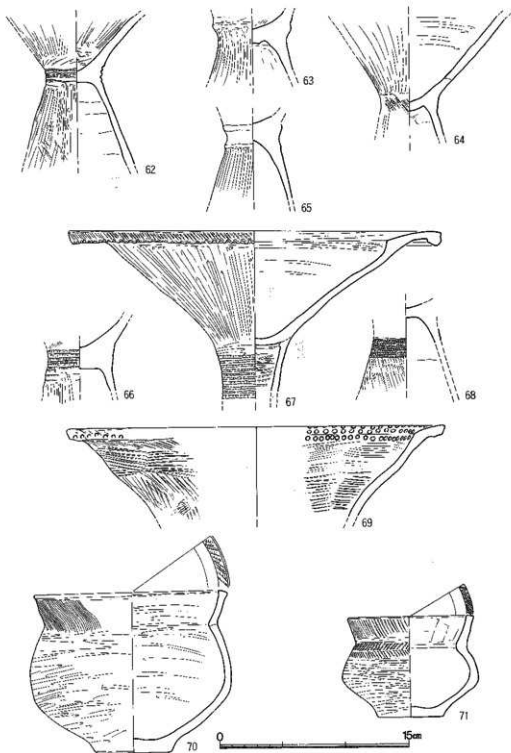
第16图 5号伴居床面出土器实测图 (1/3)



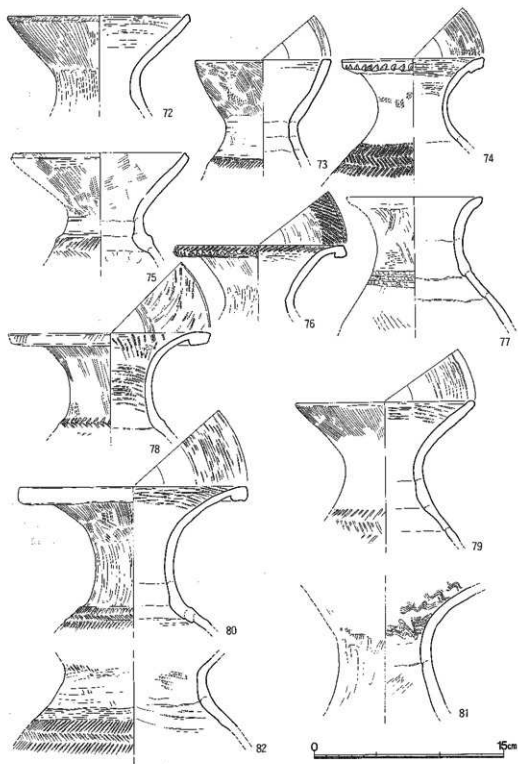
第17图 清1下層出土土器実測図(1)(1/3)



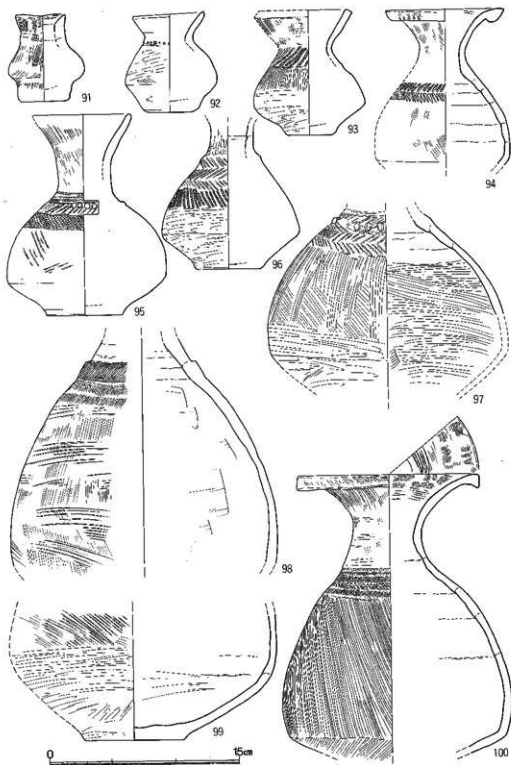
第18图 溝1下層出土土器実測図(2)(1/3)



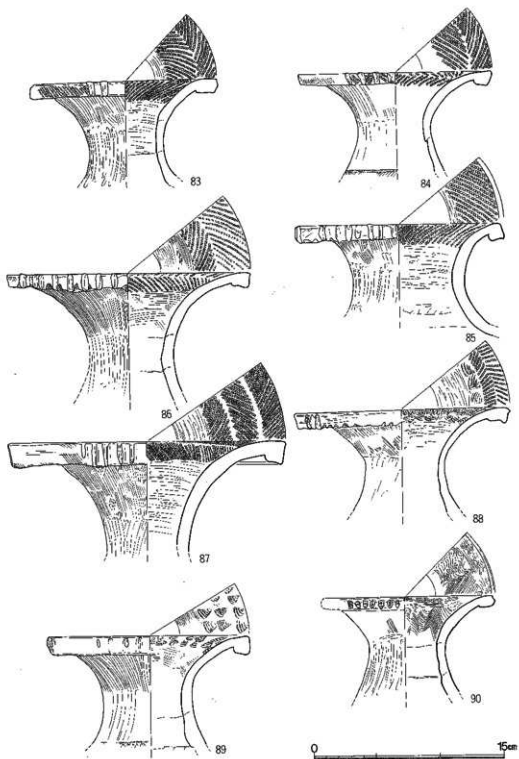
第19圖 溝1下層出土土器実測図(3) (1/3)



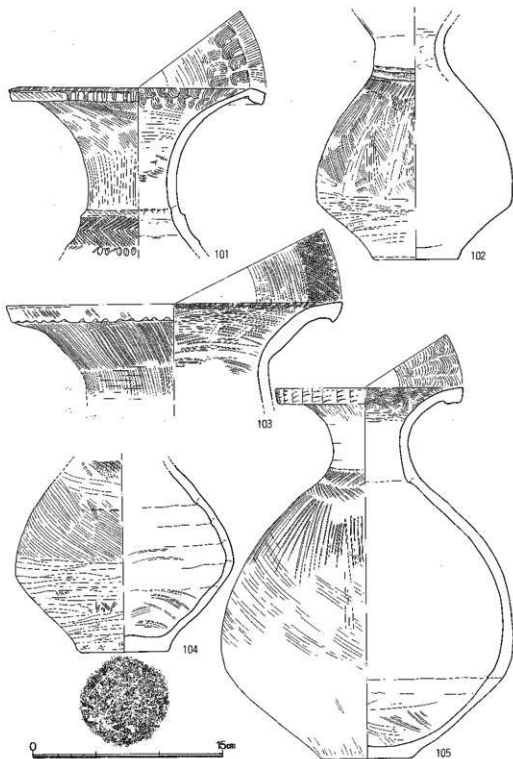
第20图 沟1上层出土土器实测图(1) (1/3)



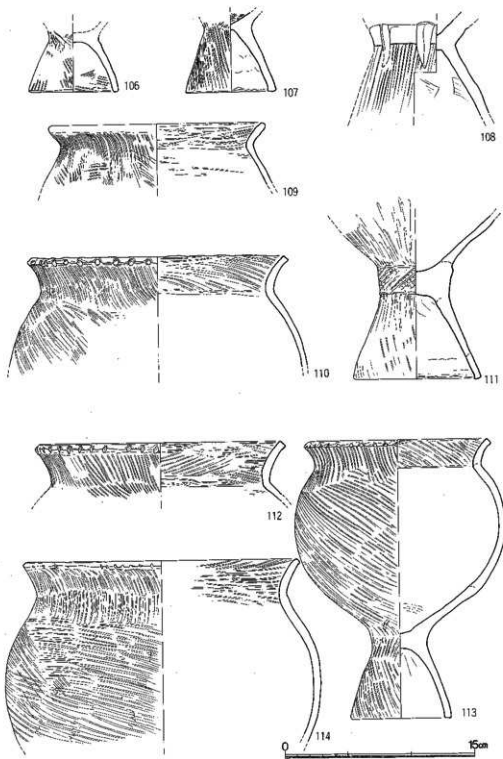
第21図 溝1上層出土器実測図(2)(1/3)



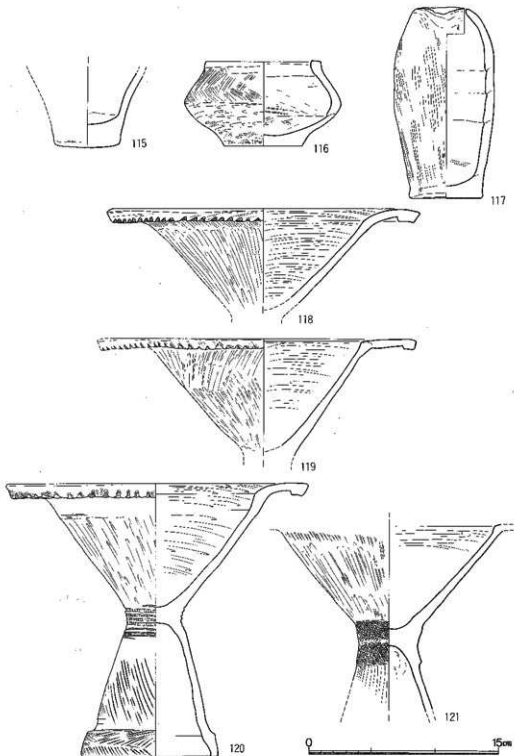
第22图 湾1上層出土土器実測図(3) (1/3)



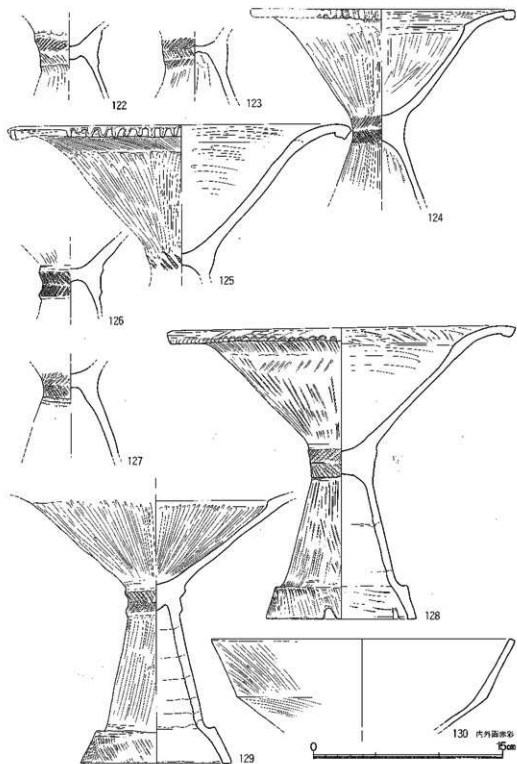
第23圖 溝1上層出土土器実測圖(4)(1/3)



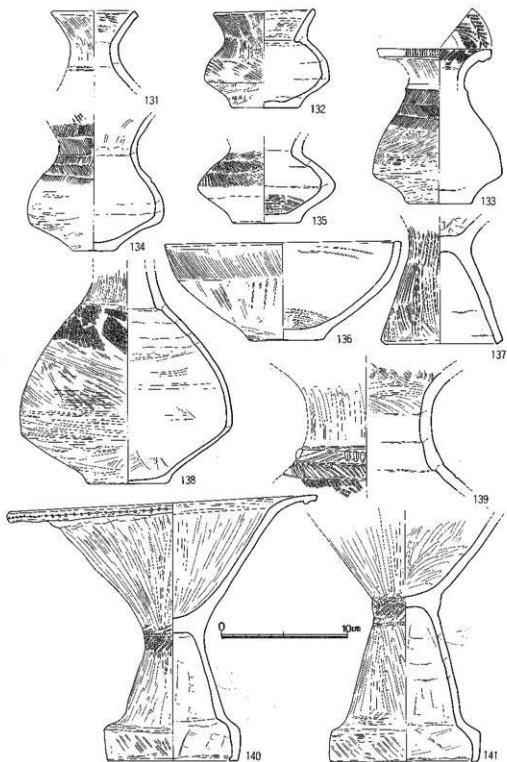
第24圖 海1上層出土土器実測図(5)(1/3)



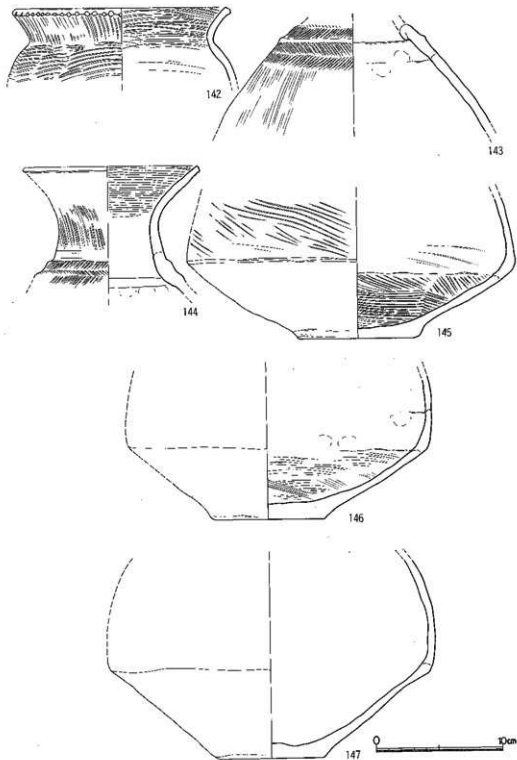
第25图 溝1上層出土土器実測図(6) (1/3)



第26图 潢1上層出土土器実測図(7)(1/3)



第27图 A地点出土土器实测图 (1/3)



第28圖 上坑1出土土器実測圖 (1/3)

第2節 木 器

1) 槽

W-1は、槽の底部の破片である。細片のため、全体の形状は不明であるが一木より削り貫きを行なっている。断面はコの字状を呈すると推定される。

2) 農 具

W-4、5の二者は、着柄鍬の柄である。柄の多くを欠くが、着装部は、両者ともほぼ完形に近い。柄と鍬頭部の着装角度は、65度から70度である。

加工痕としては、つる等で着装するための削り込みが有る。木取りとしては、樹木の幹と枝部の境を利用している。

W-6は、先のW-4、5と同一のものかは不明であるが、その頭部に着装される鍬である。着装部を断面半円形に削り出しており、柄の着装面は、平端となるように加工している。その着装部から、ハの字状に広がり、緩やかに曲線を描きながら、先端部へ向かつては、直線的に整形されている。側面は、2次的なものか不明であるが、火を受け、炭化している。

W-7は、一木造りの長柄鋤である。柄の先端は、T字形と、三角窓を開ける形態の中間的な形状を呈し、三角状に削り、突手を削り出している。先端の観察からは、若干の使用痕が認められる。整形にあたっては、柄の精緻な加工や、鍬頭部の加工痕等、鉄器を使用していると考えられる。また、用途は不明であるが、頭部側面に1cm前後の削り込みが一方のみ有る。

W-8は斧の柄である。自然木をうまく利用しており、柄は緩やかに湾曲する。先端部は、一部欠損するが、石斧を着装するための削り貫きがある。

3) 建築材、他

W-2は、止め釘の一部であると考えられる。円筒形の木より、断面長方形の部位を削り出しており、この部分には、ほぞ穴を有している。明確には、接合しないが、W-2の先端部はW-3のようなものが想定される。四方の面は、平端に調整され、断面四角形を呈する。先端部は、斜めに加じられている。

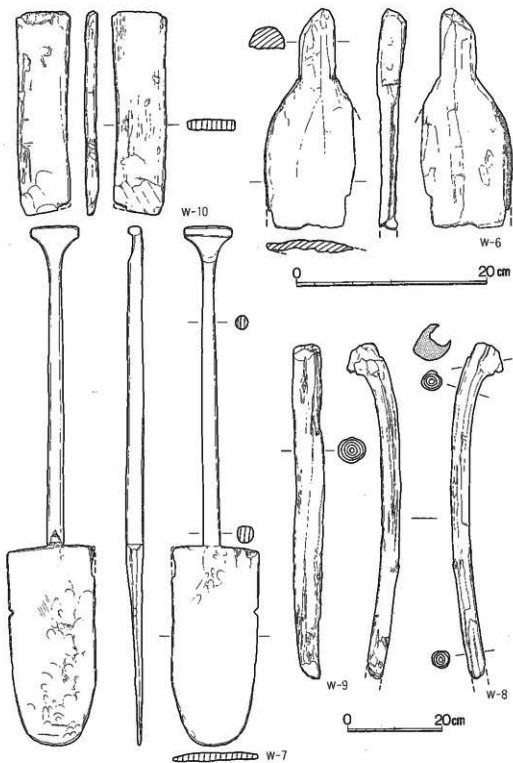
W-9は、杭である。先端部を若干削り落しており、尖っている。

W-10は、矢板である。四方の面を平端に加じしており、その先端部は、両面を若干、斜めに削り取り、鋭角を呈している。

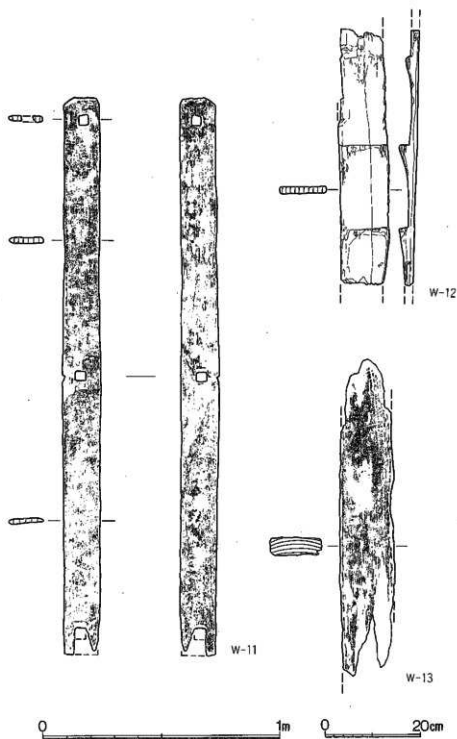
W-11は、桁材と考える。建物が立ったまま、火災を受けているようであり、ほぼ全面が炭化している。しかし、ほぞ穴を開ける部分は、周辺が13cm×16cm程度炭化せず残っており、角柱よりも、ねずみ返しに着装されていた可能性が高い。とすれば高床倉庫の桁材となる。材の長側面は丸く角が取られ、ねずみ返しの着装が想定される部分は、四角に削り出されている。

W-12は、高床倉庫の梯子である。欠損しているが、三段分確認できる。

W-13は、用途不明であるが、炭化している点など、先のW-11との関係が予想され、建築材の一部と考える。四角の面は平端に加工している。



第30圖 A地点出土木製品実測図(2)



第31圖 A地点出土木製品実測図(3)

第4章 理化学的分析

袋井市、掘越遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、掘越遺跡における稲作跡の探査を試みたものである。

2. 試料

試料は、遺跡の調査担当者によって採取され当研究所に送付された4点である。

図1に、土層断面図と分析試料の採取箇所を示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40 μ m、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（30W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20 μ m以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁶g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である

(杉山・藤原、1987)。

4. 分析結果

プラント・オバール分析の結果を表1および第33図、第34図に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考 察

(1) 稲作の可能性について

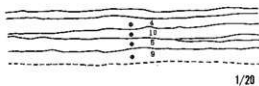
水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オバールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オバール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

4層、10層、5層、9層について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネのプラント・オバールが検出された。このうち、5層では密度が8,500個/gと高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。4層でも、密度が3,700個/gと比較的高い値であることから、稲作が行われていた可能性が考えられる。なお、10層と9層では、密度が700個/gと微量であることから、上層などからの混入の可能性が高いと考えられる。

以上のことから、同地点では4層および5層で稲作が行われていたものと推定される。

(2) 稲作の生産量の推定

稲作が行われていたと推定された4層と5層について、そこで生産された稲作の総量を算出した。その結果、前者では面積10aあたり5.0t、後者では9.6tと推定された(表1)。当時の稲作の年間生産量を面積10aあたり100kgとし、稲わらがすべて水田内に還元されたと仮定すると、4層で稲作が営まれた期間は約50年間、5層では約100年間とそれぞれ比較的長期間であったものと推定される。

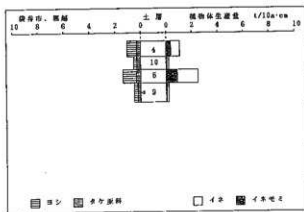


第32図 土層断面図と分析試料の採取箇所



第33図 イネのプラント・オパールの検出状況

(注) ◀印は50mgごとのスケール、・印は分析試料の採取箇所



第34図 おもな植物の推定生産量と変遷

(注) ◀印は50mgごとのスケール

表1 プラント・オバール分析結果

袋井市・堀越遺跡

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(粃総数) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
4	7	13	1.00	3,700	4.95	1,400	5,900	0	0
10	20	11	1.00	700	0.79	700	6,100	700	0
5	31	11	1.00	8,500	9.63	1,900	6,500	600	0
9	42	16	1.00	700	1.15	700	4,400	0	0

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志, 1987, 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オバール分析, 赤山—古環境編—, 川口市遺跡調査公報, 第10集, 281-289.
- 藤原宏志, 1976, プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, 9: 15-29.
- 藤原宏志, 1976, プラント・オバール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定—, 考古学と自然科学, 12: 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オバール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オバール分析法による水田址の探査—, 考古学と自然科学, 17: 73-85.

1. 試料

試料はNo 1～13の13点で、弥生時代後期のものとされる高床式倉庫の建築材と農具などである。

2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール (Gum Chloral) で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版 (図版1～3) も作製した。

3. 結果

試料は以下の9種類 (Taxa) に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各 Taxon の科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」(1989) にしたがった。また、一般的性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」(1979～1982) も参考にした。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 No.12.

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は接線状に散在し樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型 (Cu pressoid) で1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州 (福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内では現在スギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きい、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州 (岩手県以南)・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樫や楠にするほか各種の用途がある。

・マキ属の一種 (*Podocarpus* sp.) マキ科 No.7、8、10、13.

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞は早・晩材部の別なく散在し、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～2個。放射組織は単列、1～20細胞高。

マキ属にはイヌマキ (*Podocarpus macrophyllus*) とナギ (*P. nagi*) の2種がある。イヌマキは本州 (房総半島以西)・四国・九州・琉球の主として沿海地に分布し、ナギの自生地は本州から琉球に点在するが、神社などに植栽される常緑高木である。材はやや重硬で、加工性は中程度、割裂性は大きく、保存性・耐水性が高い。建築・土木・器具・薪炭材などの用途がある。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* var. *sachalinensis*) クルミ科 No. 9.

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2~4個が複合、横断面では楕円形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性Ⅲ型、1~6細胞幅、1~40細胞高。柔組織は短接線状、周囲状および散在状。年輪界は明瞭。

オニグルミは北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として広く用いられるほか、各種器具・家具材などの用途も知られている。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.) ブナ科 No. 11.

環孔材で孔間部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものとの複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(いわゆるドングリ)が2年目に熟するグループで、クヌギ (*Quercus acutissima*) とアベマキ (*Q. variabilis*) の2種がある。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州・琉球に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが中用地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材、櫓木などの用途が知られる。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るがさらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科 No. 1

環孔材で孔間部は1~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状~網目状となる。放射組織は同性、単列、1~25細胞高のものとの複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属の中で果実が1年目に熟するグループで、カシワ (*Quercus dentata*) ・ミズナラ (*Q. crispula*) ・コナラ (*Q. serrata*) ・ナラガシワ (*Q. aliena*) といくつかの姿・品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・櫓材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギに次ぐ優良材である。

・コナラ属アカガシ亜属の一種 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科

No 4.

放射孔材で、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状となる。放射組織は同性、単(一部2)列、1~15細胞高。柔組織は短接線状および散在状。送付された試料片は小さく、複合放射組織と年輪界を含んでいなかった。

アカガシ亜属(カシ類)には、イチイガシ(*Quercus gilva*)、アカガシ(*Q. acuta*)、アラカシ(*Q. glauca*)など8種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木~小高木のウバメガシ(*Q. phillyraeoides*)も、材構造上はカシ類と類似する。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。材は重硬・強靱で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。

・クリ(*Castanea crenata*) ブナ科 No 3.

環孔材で孔部は1~4列、孔部外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大管は単独、横断面では円形~楕円形、小管は単独および2~3個が複合、横断面では角張った楕円形~多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状~網目状となる。放射組織は同性、単(~2)列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。[木・建築・器具・家具・薪炭材、棺木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・サカキ(*Cleyera japonica*) ツバキ科 No 5, 6.

散孔材で、横断面では多角形、単独または2~3個が複合する。道管は階段穿孔をもち、段(bar)数は20前後。放射組織は異性、単列、1~20細胞高。年輪界は不明瞭。

サカキは本州(石川・茨城県以西)・四国・九州・琉球に自生するとされる常緑高木で、暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、神社などに植栽される。このため本来の自生北限は明らかではない。材は重硬・強靱で、割裂しにくく加工は困難。建築・器具材としても用いられるが、薪炭材として一般的である。枝葉を玉串として用いることで知られる。

・ヤマウコギ(*Acanthopanax spinosus*) ウコギ科 No 2.

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2~8個が斜~放射方向に複合し接線状に配列、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、数細胞高のものから広放射組織まであり、鞘細胞(sheath cell)が認められる。柔組織は散在状。年輪界はやや明瞭。

ヤマウコギは本州(岩手県以南)の山野に普通の落葉低木で、時に生け垣として栽培される。材は重硬であるが、小径であるため用途は特に知られていない。

以上の同定結果を用途とともに一覧表で示す(表2)。

表2 堀越遺跡出土材の樹種

試料番号	図版番号	遺物番号	用途	種 名
1	W-12	W-50	梯子	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
2	W-8	W-2	斧柄	ヤマウコジ
3	W-10	W-21	矢板	クリ
4	W-6	W-35	鋏	コナラ属アカガシ亜属の一種
5	W-4	W-26	鋏柄	サカキ
6	W-5	W-25	鋏柄	サカキ
7	W-3	W-38		マキ属の一種
8	W-2	W-9	建築材?	マキ属の一種
9	W-1	SD-A 一括	槽	オニグルミ
10	W-9	W-44	杭	マキ属の一種
11	W-7	W-28	長柄鋤	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種
12	W-11	W-1	桁	ヒノキ属の一種
13	W-13	W-49	建築材	マキ属の一種

4. 考 察

同定対象とされた試料数は少ないが、鋏・鋤には重硬なアカガシ亜属とクスギ節が、鋤柄には強靱なサカキが、槽には加工性のよいオニグルミが用いられるなど、それぞれの用途に適した樹種を選択しているといえる。また、試料を通覧するとマキ属がやや多い傾向が認められ、建築材に2点、杭に1点、ほぞ穴のある材1点があげられている。

農耕具にアカガシ亜属、それらの柄にサカキ、柱などにマキ属が用いられている例は、静岡市有東遺跡出土の弥生時代中期とされる試料(山内 1983)や愛知県小坂井町篠東遺跡の弥生時代とされる試料(山内 1961)でも知られている。ただ、尚遺跡試料ともスギも認められている(特に有東遺跡ではスギが建築材・日用品・農具などに用いられ、全試料数の58%強を占めている)のに、今回の試料の中にスギは認められていない。これは試料数が少ないことによるものか、周辺植生に違いがあったためなのかは判断できない。

引用文献

- 平井信二 1979~1982 「木の事典 第1巻~第17巻」、かなえ書房。
 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」、平凡社、321・305pp。
 山内 文 1961 篠東遺跡出土木材、『篠東 篠東第二次・經王・行明調査報告』、愛知県小坂井町教育委員会、18-19。
 1983 有東遺跡出土の木質遺物について、『静岡県文化財調査報告書 第28集 有東遺跡 静岡南警察署建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』、静岡県教育委員会、68-72。

第5章 ま と め

1) 掘越遺跡の景観復元

今回の第1次、第2次調査により弥生時代の竪穴住居6棟、掘立柱建物3棟、大溝1条他を検出しているが、以下では、その総合的な景観に目に向けて見たいと思う。

まず、その立地であるが、現在は、その形状をかなり変えているものの、古い地籍図を見ると「城山・ジョウヤマ」と呼称される地域があり、東西約200m、南北約50mの微高地が明確に残っている。今回の調査では、その北西端を発掘したわけで、この地籍図の「ジョウヤマ」の範囲がほぼ、掘越遺跡の集落の広がりと考えられる。

この集落内には、ほぼ東西方向に、今回検出した溝1が伸び、その南北には、竪穴住居址が6棟以上建っていたと考えられる。そのような中で、掘立柱建物は、竪穴住居とも、浅い溝によって区画、配置されている。これは、その使用目的に対し、特別な意味が持たれていたと考えられる。1つには、特別な使用目的の平地式住居、さらにもう1つは、今回の出土^{41.1)}建物中に梯子の存在があり、高床倉庫の二者が想定される。現在まで諸種の検討がなされているが、平面形態のみからは、建物の性格の特定は困難を考えられ、ここでは、竪穴住居とは区画される建物ということのみにとどめておく。

集落内を走る溝1は、所謂環濠として、集落内を巡るものではなく、且つまた、防御的な性格を持つものでもないとする。つまり、その左右両岸には、住居址が有ることがその防御的な性格を否定するものである。ただ繰り返す述べるように、その左右で遺構の濃密に差があり、何らかの区画の意味は存在するものと思われる。この溝1の本来の機能は、低湿地に繋がることから、排水と、そこからの水を集落内で使用することを考えれば導水用の水路と言える。この溝1が繋がる低湿地からは、プラント・オーバー分析により水田の可能性が高いことが指摘され、集落と、田地の位置関係を復元する好例となる。

この田地と想定される低湿地は、その下面では、砂利層が検出され、その中より時期は不明なものの、洗い流された状態の土層が少量含まれており、潮水も激しかった。この状況は、第35図に示した、旧流路の推定線に合わせた場合、徳光遺跡付近で大きく蛇行した流路が、掘越遺跡の西方を南北に、上橋遺跡の東方へ伸びる流路が1条想定されているが、ある時期、掘越遺跡の北方で大きく蛇行していた時期があって、その後、流路が西方に移行してゆく際に、除々に、微高地の形成も進み、その中で、低湿地も形成されたと考えられる。

前後するが、第35図は、加藤芳朗氏が先年より当該地域の土層を精力的に観察され、まとめられた図を^{41.2)}基に、近年実際の発掘調査によって得られた結果を盛り込み加筆したものである。流路による微高地の形成と遺跡の立地が良好に読み取れると思われる。

また、遺構のところで述べた、スクモ層について、遺構面を覆う時期が、弥生時代の末と^{41.3)}考えられ、これが集落の廃絶の時である。これは、加藤氏の指摘される小海進の時期と合致し、水位の上昇が、掘越遺跡の廃絶の一端となっていたようである。



第36図 掘越遺跡周辺旧地形復元図 (原図作成 森井雅彦氏)

	調査年月日	調査内容	遺構・遺物の状況	文献
1	平成2年6月27日	試掘	中世、弥生時代の遺構・遺物有り。	
	平成2年11月2日～ 平成2年12月29日	本調査		
	平成2年4月27日	分布	可能性有り。	
2	昭和62年1月14日	試掘	無。	
3	平成元年5月12日	分布	可能性有り。	
4	昭和56年2月23日～ 昭和56年5月30日	本調査	古墳3基以上、住居址(時期不明)、土埴	1982『鶴松古墳群・ 機ヶ谷古墳群』
5	平成2年6月26日	分布	無。	
6	平成2年6月25日	試掘	中世、弥生時代の遺構、遺物有り。	
7	昭和58年7月19日～ 昭和58年8月26日	本調査	弥生時代の住居址10棟、堅穴、溝6 条、土器多数。	1983『鶴松遺跡Ⅲ』
8	平成2年6月25日	試掘	弥生時代の遺構、遺物有り。	
9	昭和47年	本調査	堅穴住居22棟、大溝、弥生時代の土器多数。	1983年『袋井市史』
10	平成元年11月19日～ 平成元年3月7日	分布	可能性有り。	
		試掘	弥生時代の遺構・遺物有り。	
11	昭和57年2月22日～ 昭和57年3月30日	本調査	住居址1棟、堀立柱建物1棟、土坑7 基、溝9条他、弥生時代の土器多数。	1987『鶴松遺跡Ⅱ』
12	平成2年6月28日	試掘	弥生時代の遺構・遺物有り。	
13	平成3年3月6日	試掘	無。	
14	昭和41年12月1日～30日 昭和42年6月6日～14日	本調査	溝1条、弥生時代の土器多数。	静岡県教育委員会1988『東名高速道 沿線埋蔵文化(弥生前期調査報告書)』
15	平成元年2月21日	試掘	弥生時代の遺構、遺物有り。	
	平成元年2月21日～22日	本調査	弥生時代の溝2条、土坑1基。	第1次調査
	平成2年4月1日～ 7月31日	本調査	住居址、遺構他。	第2次調査
16		試掘		
17	平成2年10月25日～ 平成2年10月26日	試掘	溝1条	
18	昭和57年4月6日～ 昭和57年9月30日	本調査	溝、池等。土師器、中世陶器。	1985『土橋遺跡』 —基礎資料編—
19	平成2年4月24日	試掘	溝1条、土師器小量	
20	平成3年3月12日～13日	試掘	無。	
21	平成元年12月4日	分布	可能性有り。須恵器、土師器、山茶碗。	
22	昭和57・58年	本調査	弥生時代から中、近世の遺構、遺物多数。	1985『土橋遺跡』 —基礎資料編—
23	昭和58年10月1日～ 昭和59年3月31日	本調査	弥生時代から近世の遺構、遺物多数。	1984『玉越遺跡』静岡市文化 財保存審議会1985『玉越遺跡』

第3表 堀越遺跡周辺の遺跡調査記録一覧表(平成3年3月現在)(森井雅彦氏 作成)

2) A地点出土建築材の復元

A地点より出土した木製品中に数点の建築部材と考えられるものがあった。そのうち、最も良好な形で出土したW-11は、火災を受けていると推定され、その残存状況は、建物の復元に示唆を与えるものであった。

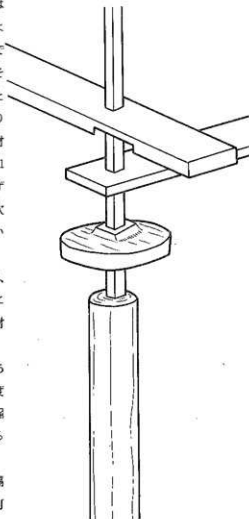
W-11には3ヶ所に 6×5 cm角のほぞ穴が掘られている。図版9の11-Cに見るように、一方の面は平端に加工されているが、11-B、D、Eに見るごとく、反対の面は、 16×13 cm角部が、火災を受けずに残っているととも、方形に若干の削り出しを持っている。このことは、材の両面において、その使い分けがあったことを示すものである。つまり、建ったままの状態で焼失したのであれば、この、ほぞ穴周囲の 16×13 cm角の部分には、それだけの面を持つものが接合されていたことになる。そう考えると、弥生後期の段階での出土例よりすると、角柱の例は少く、丸柱の1半分を加えた、通し柱形式の高床倉庫の例は、多く報告されている。しかしこれでは、火災を受けない面は、丸く残るはずである。ここで想起されるのが、同じA地点よりW-12の高床倉庫の梯子が出土していることである。高床倉庫には通常、ねずみ返しが付き、その着装状況は、山木遺跡の出土例^{注4)}により明らかとなっている。つまり、円盤状の板から四角く削り出された面を上面とし、この面には、梁材と桁材が当たることになる。このことよりすれば、W-11のほぞ穴周辺の方形に焼け残った部分には、ねずみ返しが付くことが想定できる。そして、ほぞ穴の状況よりすれば、柱は、通し柱形式を用いていると考える。

ここでW-11単独では、建物として成り立たず、他の部材との組み方が問題となる。W-11自身には、接合のための加工は認められず、接合する材に加工が施されていることになる。

そうした材の例は、山木遺跡の出土材の中にあ^{注5)}り、ほぞ穴の周囲を方形に、材の厚さの半分程度を切り込んでおり、こういった形状のものが、堀越遺跡出土のW-11の上に組合わされると考えられる。

そして、W-11の柱間が2間で、1m10cm間隔であることよりすれば、高床倉庫の桁材である可能性が高い。

以上をまとめると、第36図のようになる。



第36図 A地点出土建築材復元模式図

3) 土 器

第3章で述べたように、今回の調査では多数の土器を検出するとともに、それらは、出土状況より一括性の高いものであることが現らかとなった。多数の土器について個々に観察し、報告する時間も無く、未整理の部分も多い。しかし、ここで、現段階までの所見を基に、出土土器の位置付けを示しておくことは必要と思われる。以下では、堀越遺跡の出土土器を中心とし、周辺遺跡出土弥生時代後期の土器と比較を行なう。

まず、古い様相を示すと考えられるものは、2号住居、5号住居内の床面出土土器の中に見ることができる。2号住居の16の高杯は、若干の折り返しを持ち、杯部内外面と、脚部外面にミガキを施す。杯部と脚部の接合面には押圧横線文を数条巡らし、口縁外面の刻みは小さいことを特徴とする。台付甕では、6・10・12に見るように、口縁部付近は、緩かなS字状を呈し、口縁外面には、外面に向かって面を有する形状を呈する。胴全体の形状は、肩部が張ることを特徴とする。同じような視点により、5号住居の台付甕38・39・40も捉えられると考える。また、壺では5号住居の33などが、その形態において、丸身を持ち、頸部と、胴下半部にミガキを有する。

次の段階の資料としては、3号住居や6号住居がある。3号住居の壺18のように、肩部に有段状刺突を施したり、口縁部の形状では、21・23・26のような、内面には縄文や波状文を施し、外面には棒状浮文を付すものがある。ただし、22・28は、その形態が、丸身を持ち、一括性が高いと言えるものの、両者は、住居址の中でも、ピットの資料であり、住居址の床面の資料とは分けて考えたほうが良いと考える。

甕については、口縁端部は、外面に面を有し、刻みは小さい。胴の形状は、明瞭に肩は張らず、緩かな流れを示す。

また、ほぼ同時期の資料としては他に、溝1の出土土器がある。上層、下層に分けることが可能であり、両者には、若干の形態差は認められるものの、ほぼ近接する時期の前後関係資料と考える。

下層では、62・66・67・68の高杯は、杯部と脚部の接合部に数条の押圧横線文を施し、口縁端部は、折り返し口縁である。杯部の内外面及び、脚部の外面にはミガキが施される。壺では、単純口縁の43、受け口口縁のもの44が出現してくるとともに、46・48のような折り返しは縁で、内面に縄文を施すものもある。肩部の文様としては、47・49・50のような羽状刺突を基本とし、48のような押圧横線文も見られる。

台付甕の口縁端部は丸みを持ち、口縁の形状はく字状のものとなっている。

上層では、ほぼすべての高杯が折り返し口縁を有し、120のように杯部と脚部の接合部に押圧横線文を施すもの他、128のように羽状刺突を施すものが中心となる。壺では、105のように、やや細長い形状を呈するものが存在する他は、胴部最大径を下方へ移行された、102・96等が中心となる。胴部の装飾は、羽状刺突を基本とし、有段をなすものは少ない、口縁の形状は、折り返し口縁と単純口縁のものがあり、折り返し口縁のものは、内面に縄文を施すものが多い。83～89のように口縁外面に棒状浮文を付すものも主体的である。

次の段階のものは、A地点出土土器と、土坑1出土土器がある。

高杯では140・141のような、杯部と脚部の接合部には、単条の刺突を施すものや、図示していないが、数段の有段円状刺突を施すものもある。甕では、胴部最大径が下半部へ移り、ソロバン状を呈する133・135他があり、肩部には羽状刺突を施している。

以上のような三区分を、それぞれ、周辺遺跡出土土器に対比させて見ると、堀越遺跡の2号住居及び5号住居資料は、鶴松遺跡の3TSD1の資料に近い状況を示す。ただし、高杯の整形状況よりすれば、堀越遺跡の資料が若干粗雑であり、やや後出的な要素を持っていると考えられる。

次に、3号住居・6号住居及び溝1の上層・下層資料であるが、これは、土橋遺跡のSK-3、SD-45・SD-120がほぼ対応すると思われる。

A地点出土土器と土坑1出土土器は、その形態、施文の特徴等より、権現山4号住居・土橋遺跡SK-77・玉越遺跡SD-14が並行すると考えられる。

このような時期区分は、中嶋郁夫氏によって提唱されている編年に合致するものであり、それぞれ、2号住居・5号住居資料が中嶋氏の菊川様式古様相に、3号住居・6号住居及び溝1資料が中様相に、A地点・土坑1資料が新様相にほぼ対応すると思われる。

ただし、今回は、その土器の系統の問題に一切触れていないことや、各様相内においても細分の可能性があり、今後の検討課題として残る。

堀越遺跡出土資料	対 応 資 料	中嶋編年
2号住居・5号住居	鶴松遺跡3TSD1	古 様 相
3号住居・6号住居・溝1	土橋遺跡SK-3・SD-45・SD-120	中 様 相
A地点出土土器・土坑1出土土器	権現山4号住居・土橋SK-77・玉越SD-14	新 様 相

第4表 堀越遺跡出土土器編年表

註

- 註1) 松井一明 「第3章考察」「大門遺跡―大門I遺跡第2次発掘調査報告書―」1983
- 註2) 加藤芳朗 「第3節土橋遺跡をめぐる地形・地質学的背景」「土橋遺跡―基礎資料編―」1985
- 註3) 加藤芳朗 「付載第1伊場遺跡をめぐる自然環境の地質学的検討」「伊場遺跡資料編―伊場遺跡発掘調査報告書第2冊―」1977
- 加藤芳朗 「第3節土橋遺跡をめぐる地形・地質学的背景」「土橋遺跡―基礎資料編―」1985
- 註4) 非山村 「非山村山木遺跡」1962
- 註5) 註4)に同じ
- 註6) 中嶋郁夫 「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の内検討」「転載」2号 1988

付篇 第1次調査の報告

1. はじめに

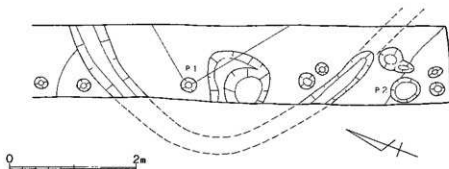
試掘調査の結果開発予定地内に弥生時代の埋蔵文化財の所在が確認され、この結果をうけて平成2年度に平面調査を計画した。しかし、観光センター建設を行うについて事前に開発用地東端の南北に走る道路の西側1mを拡張する必要が生じた。よって、平成2年度の本調査に先行して、この道路拡張部分について平面調査を平成元年9月21日～9月22日の2日間で行ったこととし、この調査を掘越ジョウヤマ遺跡第1次調査とした。発掘調査担当者は、袋井市教育委員会主任学芸員吉岡伸夫、同学芸員松井一明で98条の2の届出を提出した。

表土は重機にて掘削し、遺構や遺物の包含層が確認できた時点で人力の精査に切り替えて実施した。写真は35ミリ判の白黒およびカラーリバーサルフィルムにて撮影し、実測図は遺構平面図は20分の1、遺物出土状態は10分の1で実測した。

2. 遺構

幅1mの狭い範囲での平面発掘調査であったが、竪穴住居1棟、溝状遺構2本、低地と思われる有機質混じりの粘土層が確認できた。

竪穴住居（第6号住居）は楕円形ないし隅丸方形になると思われるプランで、主軸はほぼ南北方向になると思われる。壁溝と柱穴らしいもの（ピット1）が見つかったが、炉跡は住居の中心部が発掘区域外になると思われるので検出されなかった。住居内に土坑が1基見つかったが、住居に伴う貯蔵穴のようなものか遺物の出土が無かったのでわからなかった。住居の時期は、床面や壁溝内出土の土器を見ると後期後半の古段階であると思われる。



第1図 6号住居実測図

溝1は、上場で幅4m、下場で幅0.8m、深さ約1.8mで断面形はV字状になる。溝1は第2次調査部分では今回調査したほど深くはならない所見が得られているので、第1次調査部分から深くなる可能性がでてきた。おそらく、最下層の出土遺物が後期前半のものを含むので後期前半のある時期に溝が開削され、後期後半の古段階に改修し廃棄され埋没したと考えられる。溝13は、幅1.6m、深さ0.3mの浅い断面形U字状の溝であるが、第2次調査では確認されていないため土坑のような遺構になる可能性もある。時期は後期前半の土器が見られるが数は少ない。

第2次調査でも確認できた有機質混じりの粘土層の堆積が発掘区域の北半分に見られた。深さは全掘はしていないものの地表面から約2m近くあり、時期も弥生時代後期以降に堆積したものと考えられる。土器はこの層からはほとんど出ていない。

このほか、溝1より南側に柱穴と思われる小穴が多数見られ、なかでも第6号住居地の南側のビット2などに後期後半古段階の土器の大形破片があるなど住居地等の遺構が存在した可能性が指摘できる。なお、後期後半の古段階の遺構・遺物は溝1よりも南側に多く出土し、溝1が後期後半の古段階において集落を区画する用途に使われたとも推測される。

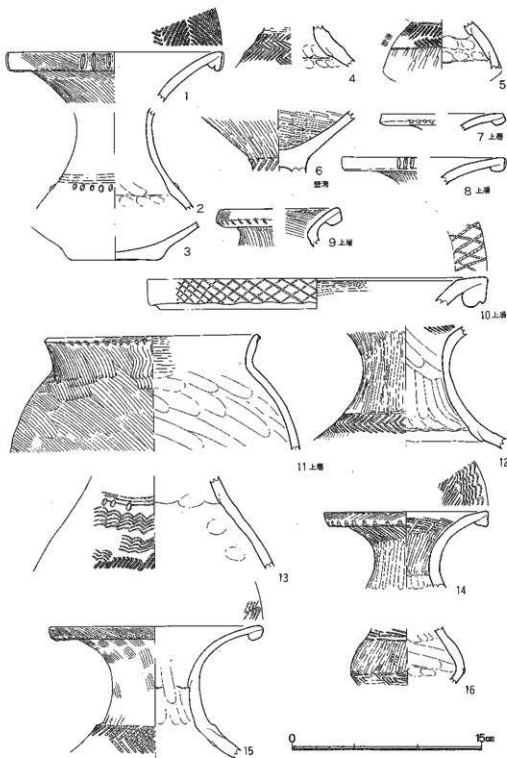
3. 遺物

土器

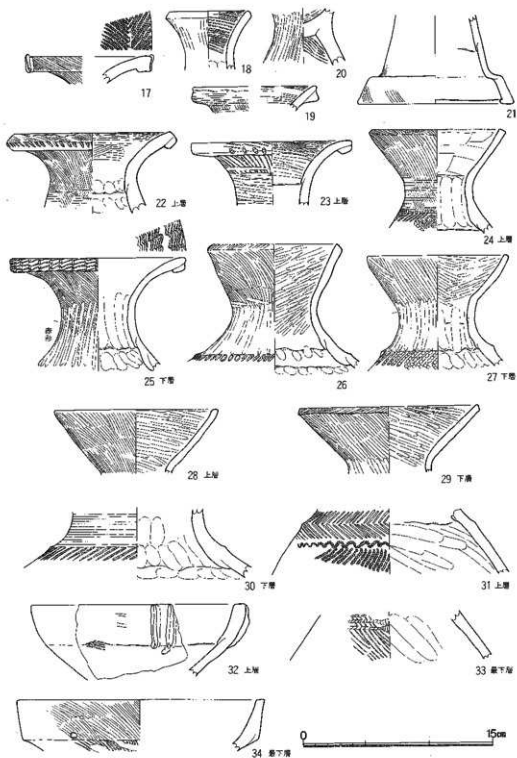
後期前半のものは溝1の最下層・溝13で出土している。貼付口縁（外見は折返状口縁としてきたが粘土紐を貼り付けて製作したもので以下貼付口縁とした）の帯で作りが丁寧な17、細頸の18などが典型で、他に鉢形高杯の20、鈎状口縁の高杯の脚部と思われる21、複合口縁で口縁端部の作りが丁寧な34、頸部に横刺突文の入る33なども後期前半の土器と思われる。

後期後半古段階のものは溝1や第6号住居で出土しており、今回調査の土器のほとんどがこの時期である。中形壺はやや内彎した単純口縁で頸部をやや細く仕上げられた24・26・27・28・29、貼付口縁で頸部をやや細く仕上げられた1・3・14・15・22・23・25、複合口縁で口縁の屈曲部の作りがやや難くなってきている32などがある。胴部の文様は後期後半期の特徴である羽状刺突文が施された12・15・24・26・27・30・31、後期前半期の特徴を残す横刺突文の2などがある。羽状刺突文は後期後半の古段階のものは1段が多いようでこれに縄文を組み合わせる31などもある。貼付口縁の口縁端部文様は下端部に刻目目を施すが、25のように櫛状工具を押し引いたような文様は珍しい。また、所謂有段羽状文は4の第6号住居で出土しているものがあるが住居に伴うか検討を要する。大形壺は広口の貼付口縁の10が知られたが小破片で全体形はわからない。小形壺は肩が丸く仕上げられ胴が張る後期後半に特徴的な5がある。16は後期前半の特徴である横刺突文が施され肩もあまり丸く仕上げられていないので、あるいは後期前半に遡るものかも知れない。

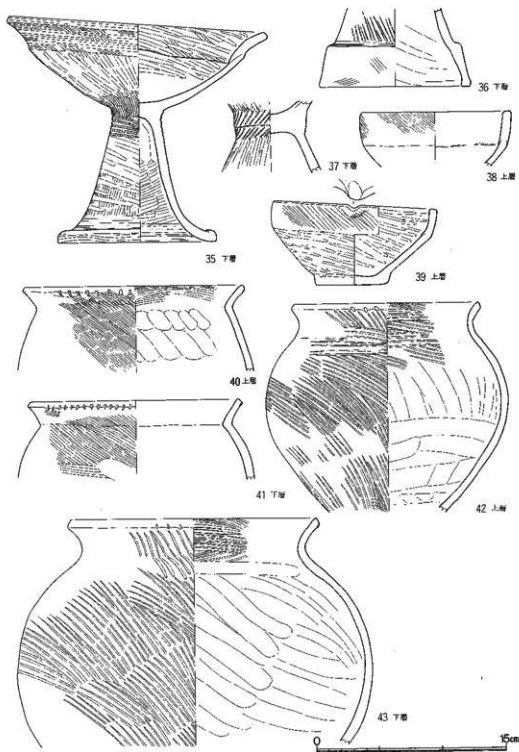
高杯は鈎状の貼付口縁と思われる6・8・36・37がある。口縁は貼付部の下端に刻目を施す7、羽状刺突が1段施される37などが典型的な型式である。菊川式特有の高杯以外に35の天竜川以西の影響を受けた高杯がある。坏部は西逆の伊場式（山中式）、接合部文様は菊川式の後期前半期の高杯の文様である多条の横刺突文、脚部の末端をやや折り返し状に仕上げる手法は



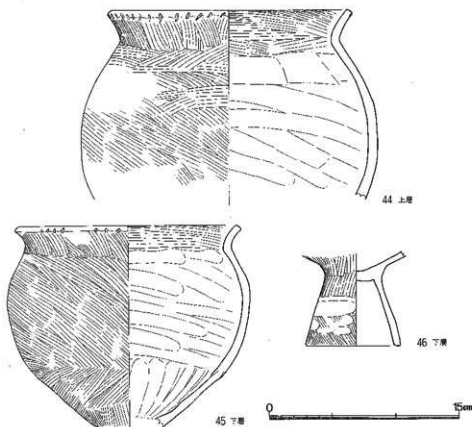
第2図 第1次調査出土土器実測図1 (1～11第6号住居 12ビット2 13～15ビット)



第3圖 第1次調査出土土器実測図2 (17~21溝13 22~34溝1)



第4圖 第1次調査出土土器実測図3 (35~43溝1)



第5図 1次調査土器実測図4 (44~46溝1)

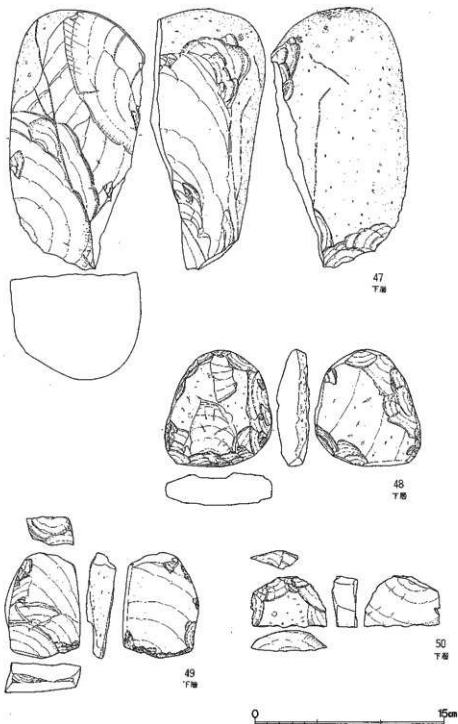
伊場式の高坏に類似する。土器の色調・胎土からは在地のものでありながら、大竜川以西の高坏に影響されたものはたとえば磐田市と袋井市にまたがる玉越遺跡などで出土している。このように伊場式(山中式)に影響された高坏が太田川水系や磐田原台地周辺部の中遠地域に分布していることは、この地域の菊川式の地域色を示す一現象と考えられ注目される。

鉢は38・39が出土している。口縁は垂直に立ち上がっている型式で口縁部は刷毛目を残している。39は片口鉢で38もおそらく片口になると思われる。

甕はくの字状に外反した単純口縁台付甕の11・40~45、貼付口縁台付甕の9がある。体部はほぼ球形で45のように胴部下半を直線的に仕上げる後期前半の特徴を残すものも見られる。

石 器

47は25cm前後の硬質砂岩の出跡を利用し、節離面によって盤状の大型剥片を剥離した石核と思われる。48、49は両面に節離面を残した剥片を素材にしていることから、同一母岩ではないものの47のような石核からとられた盤状の大型剥片で、その剥片の周辺部を粗い調整剥離を施し



第6圖 1次調査出土石器実測図 (47~50溝1)

加工した石器の木製品と考えたい。おそらく、形や大きさ、石材から見ると扁平片刃石斧の素材と考えたい。50は打製石斧の破片か、48、49などの剥片の一部かとも思われる。

これらの石器については溝1の下層から一括して出土しているので、後期後半の古段階の時期と考えられる。

4. ま と め

第1次調査では道路拡幅部分のみの調査であったが第2次調査に向けての基本資料を得たばかりでなく、遺構、出土品とも第2次調査と併せて袋井地域の弥生時代後期の文化を考えるうえで多大な貢献を成し得たものと確信する。以下、気が付いた点を列記しまとめにかえた。

(1) 集落を区画する溝(溝)らしいものが発見された。所謂円郭集落(環壕集落)になると思われ、閉鎖時期は弥生時代後期前半で埋没時期は後期後半の古段階になると推定された。今回の調査は部分発掘調査で集落の全体像がわかっていないのではたして円郭集落になるかどうかははっきりしない点があるが、地形的に沖積平野の中の独立丘陵(現在削平)を中心としそのまわりに区画目的の溝を巡らした可能性が指摘できること、溝の外側にある遺構が溝が一番機能したと思われる後期後半の古段階の遺構が少ないことなどから堀越ジョウヤマ遺跡については円郭集落と考えておきたい。これは伊場遺跡などの西遠地域の後期前半成立後期後半の古段階(後期中段階)消滅型の円郭集落にあてはめることができる(松井 1988)。ただし、堀越ジョウヤマ遺跡の場合後期前半には溝の外側に住居址が見られるのではたして後期前半の当初から区画目的の溝があったかどうか検討を要する。また、堀越ジョウヤマ遺跡のように後期後半の古段階でなく後期前半に円郭集落の消滅を見たらしい付近の歴代集落になる鶴松遺跡の集落の非円郭化の時期について再検討が必要となった。

(2) 後期後半の中段階と従来呼ばれてきた(松井編年後期中、鈴木・中島編年菊川様式中段階松井1989 鈴木1985 中島1988)土器組成の一括資料が得られた。土器組成のなかの個々の土器系列の型式つなぎについて今回は紙面と報告書刊行の期日の関係で述べないが、壺や高坏の主要器種の形態や文様を見るかぎり後期前半から引き続き流れよりも後半に向けての新たな型式の流れが強く感じられ、むしろ中段階とした内容は型式の流れからいって後期の後半の古段階としたほうが良いと考えた。今回は編年については触れなかったので無用の混乱を促すかもしれないが、敢えて予察として後期中段階・後期後半の古段階との考え方を示めておいた。(後期前半・後期前半・後期後半・後期後半の新段階)

(3) 扁平片刃石斧の製作工程がわかりそうな石器が溝1から出土した。静岡県西部域では扁平片刃石斧をはじめと打製石斧や蛤石斧の石斧類や石包丁、石鎌などの中期以来の石器が後期前半になると激減するが、後期後半の古段階まで扁平片刃石斧が比較的多く残存していたこと(松井 1989)がわかる資料である。製作工程については静岡県西部では判明している例はなく貴重である。

＜参 考 文 献＞

- 鈴木敏則 1985 「弥生時代～古墳時代の土器」『三沢西原遺跡』菊川町教育委員会
- 中島郁夫 1988 「所謂『菊川式』と『飯田式』の再検討」『転機2号』
- 松井一明 1988 「静岡県における岡部集落と高地性集落について」『マージナルN°8』愛知県考古学談話会
- 松井一明 1989 「稲作農耕と「むら」のはじまり」『浜北市史通史編』浜北市

写 真 图 版



遺構完掘状況 (南西から)



溝1完掘状況 (西から)



溝1上層遺物出土状況(1) (西から)



溝1上層物出土状況(2) (西から)



溝1上層物出土状況(3) (東から)



溝1上層断面 (西から)



1号住居完掘状況（南から）



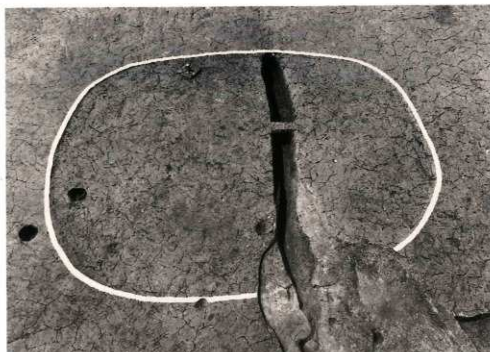
3号住居遺物出土状況（東から）



2号住居遺物出土状況（北から）



2号住居遺物出土状況・部分（北から）



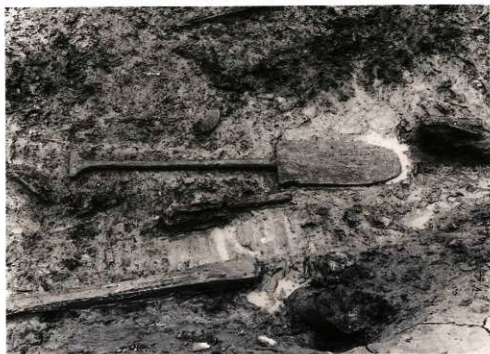
4号住居完掘状況 (北から)



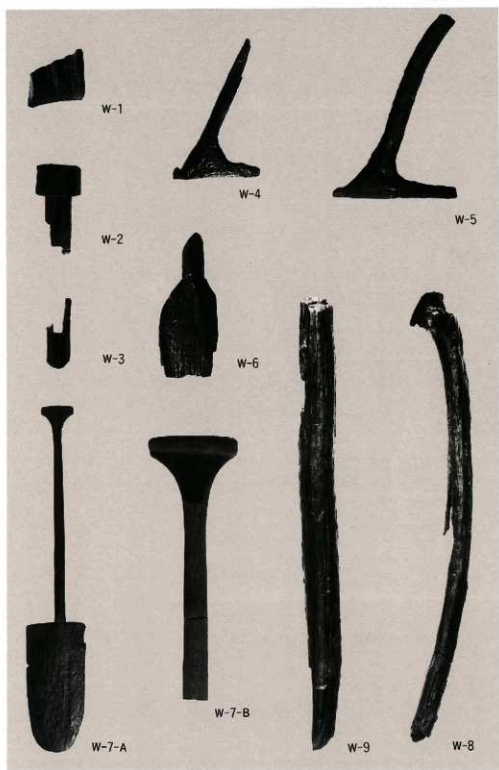
5号住居遺物出土状況 (南から)



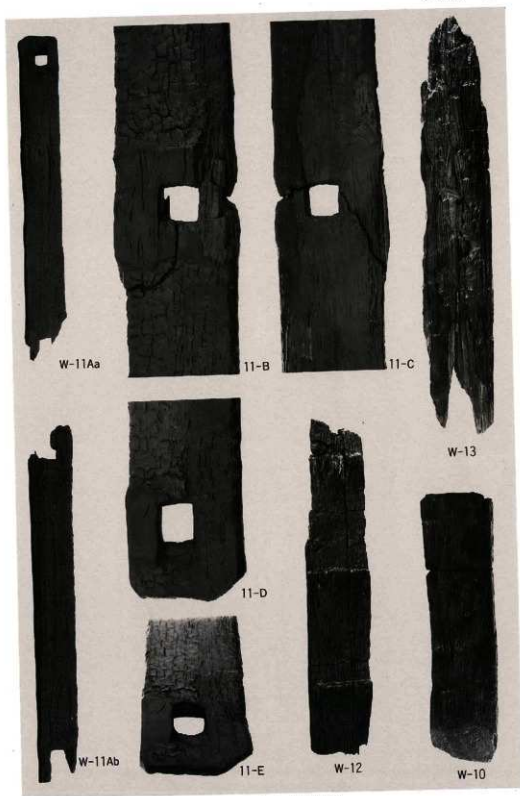
A地点遺物出土状況(1) (北西から)



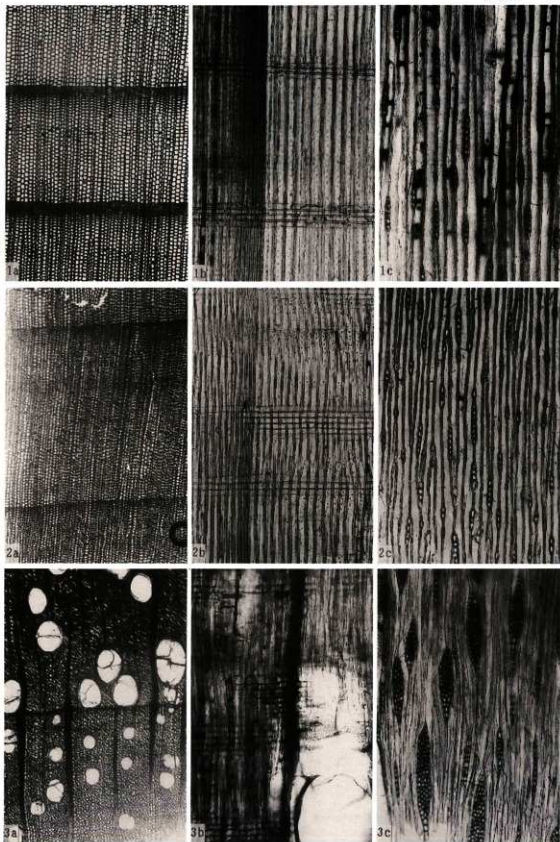
A地点遺物出土状況(2) (北から)



A地点出土木製品(1)

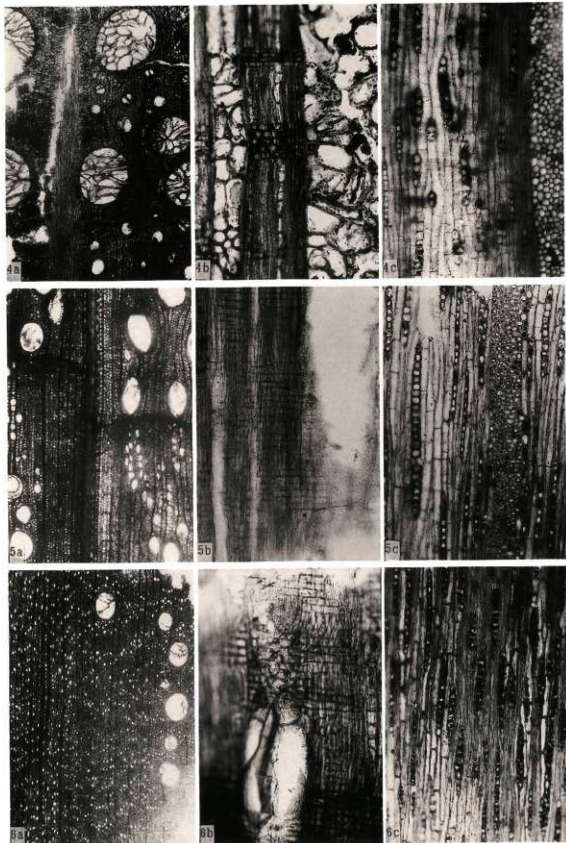


A 地点出土木製品(2)

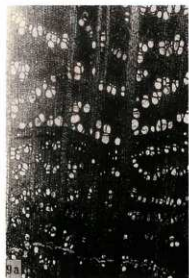


1. ヒノキ属の一種No.12 2. マキ属の一種No.10 3. オニグルミNo.9

a: 木口×40 b: 木正目×100 c: 板目×100



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種No.11 コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種No.1
6. コナラ属アカガツ亜属の一種No.4



7.クリNo.3 8.サカキNo.6 9.ヤマウコギNo.2

堀越ジョウヤマ遺跡

1991年3月30日

発行 静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市新屋一丁目1番地の1

印刷 開明堂 浜松市中沢町1-1